14.5-118
*1200601146369*

パンフレット第三十二號

# 滿洲包米に關する調査

南滿洲鐵道株式會社
庶務部調査課

貴族院
函
号
冊

始

貴族院
函
号
冊

# 凡　例

一、玉蜀黍を滿洲にては包米或は苞米と通稱す。書中皆此に從へり。

二、本編もとより滿洲包米を說いて盡さざる所多しと雖も從來此に關し纏りたる資料なきに顧み取り敢す此を印刷に附す。その盡さざるもの、誤まれるところ皆此を後日の補正に待たん。

三、編者、課員熊埜御堂健兒。

昭和二年二月

庶務部調査課

# 滿洲包米に關する調査

## 目次


第一章　包米の栽培……一
第一節　包米の來歴とその栽培極限……一
第二節　包米の分類と品種……二
第三節　包米作の氣候と土壤……三
第四節　滿洲に於ける包米の栽培……三
第五節　包米の病蟲害……五
第一項　包米の蟲害……五
第二項　包米の病害……五

第六節　包米の栽培に關する農事試驗成績……六
第一項　經濟試驗成績……六
第二項　品種試驗成績……九
第二章　包米の產額と用途……一一
第一節　滿洲に於ける包米の產額……一一
第二節　全支那に於ける包米の產額……一六
第三節　日本及朝鮮に於ける包米の產額……一九
第四節　主要國に於ける包米の產額……二五
第五節　包米の用途……二六
第三章　滿洲に於ける包米の集散と取引……二八
第一節　滿洲に於ける包米の出廻り狀況……二八
第一項　南滿に於ける出廻り狀況……二八
第二項　北滿に於ける出廻り狀況……三四





第二節　滿洲主要市場に於ける包米の集散と取引……三六
第一項　遼陽……三六
第二項　奉天……三九
第三項　開原……四二
第四項　四平街……四五
第五項　公主嶺……四七
第六項　長春……五〇
第七項　鄭家屯……五六
第八項　洮南……五八
第九項　吉林……六〇
第十項　齊々哈爾……六一
第十一項　安東……六三
第十二項　營口……六六
第十三項　大連……七一

目次

第三節　滿洲主要市場に於ける包米相場……八二
遼陽——奉天——開原——四平街——長春
第四章　滿洲包米の輸移出と輸移出先に於ける滿洲包米事情……八六
第一節　滿洲包米の輸移出狀況……八六
第二節　輸移出先に於ける滿洲包米事情……九〇
第一項　日本各地に於ける滿洲包米事情……九〇
（一）横濱、（二）神戸、（三）朝鮮
第二項　支那各地に於ける滿洲包米事情……九五
（一）上海、（二）天津



# 滿洲包米に關する調査

## 第一章　包米の栽培

### 第一節　包米の來歴と栽培極限

包米は從來野生種を發見せざりしを以て其の原産地が舊世界なるか將新世界なるかに就ては學者間に種々なる異説がある。ド・カンドール氏を初め多くの學者は亞米利加を以て其の原産地なりとの説を樹てゝ居る、而して其の亞米利加説に就ても秘露説、黑斯哥説等があつたが近年ハーシベルガー氏は種々の點より研究して黑斯哥の中部四千五百英尺の高地なる可しとの説を樹てた。又近くワットソン氏は同國『モロレオン』附近に於て一種の小粒白色小形の野生種を發見したるが是れ包米の原種なる可しと謂ふ。

包米は西歴一千四百九十二年『コロンブス』が亞米利加を、發見せる時已に此の地に於て栽培せられ居たるを以て其の種子を西班牙に傳へ地中海沿岸地方より、漸次歐洲諸國に傳播せるものなりと謂ふ。而して一千四百九十六年葡萄人此を瓜哇に傳へ更に一千五百十六年支那に入り我が國にて此を唐諸越（トウモロコシ）と稱するより見れば勿論輸入品なる可く天正四年の頃葡萄人により長崎に傳へられたるものなりと謂ふ。

本作物は元來暖地の作物なれども溫帶地方の北部にありても夏間の溫度高き所に於ては充分成熟する。我が北海道にては北緯四十五度半に達し歐洲にては五十度乃至五十二度北米にては四十八度乃至五十四度に至るまで此が栽培を見る。

## 第二節　包米の分類と品種

包米は其の品種極めて多きに依り此が分類は學者により一樣ならざるも、

キヨルニツケ氏は

特異種、甘味種、馬齒種、小粒種、普通種の五種に分ち、

スタートヴアント氏は此を

有稃種、軟粒種、爆皮種、馬齒種、甘味種、破皮種、普通種の七種に分つ。

日本內地に於て多く栽培せらるゝものは『ロングフエラー』『ホワイトフリント』札幌八行、土用早生(群馬地方)米黍(長野地方)菓子(愛媛地方)高千穗(宮崎地方)等を其の主なるものとし、前三者は亞米利加等より輸入されたるものである。

滿洲に於て多く栽培せらるゝものは黃包米、老來皺紅包米等である、黃包米は粒稍々黃色を呈し最も普通に栽培せらるゝものである。老來皺は粒白色を呈し熟すれば皺を生ずるにより此名あり、紅包米は粒稍紅色なるものである。

## 第三節　包米作の氣候と土壤

包米は熱帶地方の原產なるを以て高溫なるを要するも能く他の風土に適應し易く且つ成長速かなるにより夏期高溫にして降霜早來せざるに於ては何れの地方に於ても栽培することが出來る。結實以後は殊に高溫と乾燥とを要すると雖も成長の初期より出穗開花の頃までは稍々多量の濕氣を必要とす此れ包米は莖葉大にして葉面の蒸發量多く且つ短期間に急速なる成育を遂ぐるが故である。

又暴風は包米作に於て最も恐るゝ所である。

土壤は腐植質に富む、肥沃なる輕壤土に適し水分を要すること大なりと雖も過濕の地は良好ならず排水良好なる地をよしとす。

## 第四節　滿洲に於ける包米の栽培

播種、播種は解氷後成る可く早きを良しとす、概して大豆の播種と同時に行なはれる、金州に於ては四月十日前後、熊岳城に於ては四月十五日頃、奉天に於ては四月二十日頃公主嶺に於ては四月二十五日頃北滿地方は尙ほ此より後れて漸次播種せらる。

播種量は一段步當り平均四升乃至五升にして大豆、小豆等の間作を爲す場合は二三升を要する。

肥料、肥料は包米を主要作物とする地方では必ず此を施す、其の量一段歩當量土糞一百四五十貫乃至三百四五十貫が普通である。

除草、除草は普通三回之を行ない高粱等と殆ど同時期である。蒔き付け後約三十日を經て第一回の除草を行ない後十五日にして第二回、第二回後約二十日を經て第三回の除草を行ふ。公主嶺の例によれば第一回は五月廿五日頃第二回は六月十日前後第三回は七月一日頃行ふを普通とする。

間引、間引きは除草と同時に之を行ない、第一回に於ては密生に失する部分或は不良苗を除去するに努め第二回第三回に於て成育良好なる苗のみを殘し株間約一尺を巨て、成長せしむ。

中耕は普通三回之れを行ない、各回共除草の直後之を行ふものである。

收穫、收穫期は高粱と略同じく公主嶺に於ては九月二十二三日頃にして北滿に進むに從つて稍遲れ南行するに從つて稍早い。收穫法は鎌を用ひて根元二三寸の頃より刈り取り二十本内外宛を一束となし二三本の稿稈を曲げて此を縛す、此を梱と名付け束となすことを梱上と謂ふ。此の束は穗を上にして先づ左右より一束づゝ立てかけ次に前後より一束づゝ立てかけ倒れぬ樣にし、馴次左右前後より立て合すこと十五梱乃至二十梱にして一の纍子を作る又梱を畑上に穗先の交叉する如く伏せて乾燥せしむることがある、斯の如くして十日乃至二十日を經て充分乾燥する時は柳子(パンツ)を揉き取り苞皮を除去し脱穀場に運びて適宜の位置に推積し漸次脱穀する。

脱穀法は地上に苞皮を去りたる穗を敷き石滾子を以て壓粹又は棟枷にて叩き粒を脱落せしむるか或は穿錐と稱する大なる錐樣のものにて粒列に沿ひ三條計り突きて其の部分の粒を落し次に手の平にて他の部分の粒を捩ぎ取る。

## 第五節　包米の病蟲害

### 第一項　包米の蟲害

一、すいむし。『ズイムシ』は滿洲にては節蟲と稱せられ螟蛾類の幼蟲にして包米、高粱、粟等の髓を食し或は包米にありては苞内の穗を食害することがある。

二、こがねむし、『コガネ』蟲は滿洲にては黑睛撞蟲と總稱せらるゝ、各作物を害すれども被害多きは苞米、大豆、小豆、白菜等其の主なるものとする。

三、けら『ケラ』は地拉窟と稱せられ幼苗の根を害し殊に地下を掘りて此を枯死せしむる。

四、針金蟲、槍蜜蟲子とも稱せられ各作物の根を害す。

此の外『アブラムシ』等ありて此を害す。

### 第二項　包米の病害

滿洲に於て普通見受けらるゝ包米の病害は次の樣なものである。

一、包米の莖腐れ病　本病は包米の三四尺に發育したる頃發生するも其の被害は甚だしくない。初め地際より一二寸上方の所に發病し病勢進みて莖を一週すれば、被害部は縊れて少しく細くなり、此の部より折曲し地上に倒る

ゝ雖も此より以前に於て既に葉鞘部侵され爲めに萎凋するが故に遠くより認むることが出來る。發生したる場合には被害植物を集めて燒き棄て跡地を石灰或は木灰にて消毒する外はない。

二、包米の絲黑穗病　滿洲に於ては八月中旬頃發生し被害穗は球形若しくは楕圓形の塊となる。初め葉鞘を以て保護せられ全面白色の被膜を以て包まれ後出でゝ被膜を破り絲狀となり內部より黑褐色の胞子を飛散せしめ遂に發育不完全なる穗となる。驅除豫防方としては被害部の燒却、種子の溫湯浸漬若しくは藥劑殺菌、輪作等とす。

三、包米の黑穗病　本病は包米の栽培せらるゝ地には何れも存在するものにして一般に濕氣あり溫暖の氣候にして發育旺盛の時に發生せらるゝも米國に於ては却て乾燥の年に發生多しと謂はれる。病徵は通常雌花穗に現るゝものなれども、亦雄花、葉片、葉鞘莖、地上部に露出せる根等をも侵す。被害部は著しく膨大して瘤狀をなし時に小兒の頭大となることがある。

此の瘤狀物は初め白色の薄皮を以て蔽はるゝ雖も遂に破裂して內部より黑粉を散出するに至る。此れが本菌の胞子で多くは風により分布せらるゝも昆蟲により分布せらるゝこともある。本病の發生した場合に於ては未熟の內に集めて燒却するは最も有効なる方法で藥劑殺菌の如きは案外効果がない。

## 第六節　包米栽培に關する農事試驗成績

### 第一項　經濟試驗成績

本試驗は包米を滿洲在來の栽培法により栽培し此に對する收支を明かにせんとするにある。栽培面積は一天地にして我が六反に當る。（大正十年度公主嶺農事試驗場試驗）

A　收入の部

| 種別 | 價格 小洋銀 | 價格 金 | 摘要 |
|---|---|---|---|
| 玉蜀黍 | 四六・四六三元 | 四〇・四七一円 | 收量支那枡五石一七四　一石八・九八元。大正十年十月小洋銀相場一、一四八 |
| 稗 | 七・八四〇 | 六・八二九 | 收量　六、二三五斤 |
| 合計 | 五四・三〇三 | 四七・三〇〇 | |

B　支出の部

| 種別 | 價格 小洋銀 | 價格 金 | 摘要 |
|---|---|---|---|
| 地代 | 二六・七六五元 | 二三・三一四円 | 播種量日本升、三斗、十年四月公主嶺相場による（換算率一、五六七） |
| 種子代 | 一・八〇六 | 一・一七四 | 堆肥一、八〇〇貫、單價六十五錢　肥料に關する全經費は此を後作物にも分配し包米にはその價格の三分の一を計上せり。 |
| 肥料代 | 六・〇〇〇 | 三・九〇〇 | |
| 肥料運搬費 | 四・二〇〇 | 二・六九二 | 苦力二人、馬車一臺、（苦力一人一日小洋銀三十五錢（換算率一、五六〇）馬車一臺一日小洋銀三圓五十錢） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 施肥費 | 〇・三六〇 | 〇・二三五 | 苦力一人、堆肥を條溝内に撒布するに使用す。 |
| 整地費 | 一・四〇〇 | 〇・九二一 | 犂丈〇・五臺　馬二頭、苦力一人付の犂丈一臺を半日使用す。 |
| 播種費 | 一・六一〇 | 一・〇五二 | 苦力二人、犂丈一臺を半日使用せり。 |
| 鎌壓費 | 〇・四〇〇 | 〇・二六五 | 馬一頭、苦力一人を½日使用す。 |
| 除草及中耕費 | 一一・五〇〇 | 七・五二九 | 三回此を行ひ苦力十五人犂丈一、五臺を使有す。 |
| 收穫剝包費 | 五・四〇〇 | 三・九七二 | 苦力十二人を使用す。 |
| 運搬費 | 四・〇四八 | 三・五五一 | 苦力一・五人、馬車〇・八臺　馬四頭、苦力二人付の馬車八分を使用す。 |
| 脫粒調製費 | 二・六五〇 | 二・三六〇 | 苦力〇・五人を要す。 |
| 雜費 | 〇・二六五 | 〇・二三六 | 苦力〇・五人を要す　脫粒場整理作業 |
| 合計 | 六六・四〇四 | 五一・二〇一 | |

## C　損益計算

| 種別 | 一天地當り 小洋銀 | 一天地當り 金 | 一反歩當り 小洋銀 | 一反歩當り 金 |
|---|---|---|---|---|
| 收入 | 五四・三〇三元 | 四七・三〇三円 | 九・〇五一元 | 七・八八三円 |
| 支出 | 六六・四〇四 | 五一・二〇一 | 一一・〇六七 | 八・五三四 |
| 差引損 | 一二・〇一〇 | 三・九〇一 | 二・〇一六 | 〇・六五一 |

右收支計算によれば一天地當り金にて三圓九十錢一厘銀にて十二元一毛餘の損失を招き收支相償はざりしも當年は財界不況の爲め著しく穀價低落せるを以て前記の如き損失に終つたのである。

### 第二項　品種試驗

本試驗は各品種間の優劣を比較調査し以て優良なる品種を撰出せんとするにある。

而して左表の成績に就いて此を見るに馬牙子の收量最も多く　包米、老來皺等此に次き黃包米最も劣る。

公主嶺農事試驗場成績

| 品種名 | 子實段當收量 大正六年 | 大正七年 | 大正八年 | 大正九年 | 大正十年 | 平均 | 稈段當收量 大正六年 | 大正七年 | 大正八年 | 大正九年 | 大正十年 | 平均 | 平均子實一升重量 | 收量順位 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ホワイトフリント | 二・八〇三石 | 一・二二六石 | 一・二〇四石 | 一・九五二石 | 一・六四三石 | 一・七六六石 | 一六九・五〇〇貫 | 八七・八〇〇貫 | 一二二・〇〇〇貫 | 一二二・九〇〇貫 | 七七・〇八〇貫 | 一二二・八一六貫 | 三九匁 | 七 |
| 在來種黃 | 二・八一七 | 一・七四五 | 一・五六八 | 二・〇二四 | 一・七五二 | 一・九八五 | 一七五・三〇〇 | 二二八・六〇〇 | 一八八・八〇〇 | 二〇五・三〇〇 | 一二二・三八〇 | 一八一・五二三 | 三四八 | 五 |
| 在來種白 | 二・四九四 | 一・九九七 | 一・六八四 | 二・〇四六 | 一・七〇三 | 二・〇二二 | 一二一・二〇〇 | 一五九・五〇〇 | 二九九・五〇〇 | 二七六・五〇〇 | 一二五・〇〇〇 | 一七四・三四〇 | 三五一 | 四 |
| 蒙古種 | 二・二二八 | 一・八四六 | 一・六九四 | 二・三〇五 | 一・一七四 | 一・八四七 | 二一三・九〇〇 | 二二二・九〇〇 | 一七五・三〇〇 | 一七五・七〇〇 | 一二三・九〇〇 | 一七四・三四〇 | 三四九 | 六 |
| 黃包米 | 一・六一二 | 一・七〇六 | 一・九七六 | 二・二六八 | 〇・六六八 | 一・六四六 | 一六八・四〇〇 | 一七五・九〇〇 | 一八一・二〇〇 | 一六九・六〇〇 | 一三一・五一〇 | 一六五・五二二 | 三五六 | 八 |
| 老來皺 | 一・四四四 | 二・一五七 | 二・一七四 | 二・六一七 | 一・七三三 | 二・〇二二 | 一八六・四〇〇 | 三三七・八〇〇 | 一九一・〇〇〇 | 一七九・四〇〇 | 一三五・八七〇 | 一八三・二九四 | 三五九 | 三 |
| 馬牙子 | 一・七八四 | 二・一七九 | 二・二四九 | 二・七六九 | 一・八五四 | 二・一六七 | 一五二・四〇〇 | 二二一・八〇〇 | 二一五・八〇〇 | 一五二・〇〇〇 | 一三九・七四〇 | 一七四・三四八 | 三四九 | 一 |
| 紅包米 | 一・五八八 | 二・二二六 | 二・二五五 | 二・三六八 | 一・八五二 | 二・〇五六 | 一六六・〇〇〇 | 一七七・二〇〇 | 一八六・八〇〇 | 九四・三〇〇 | 一一〇・六四〇 | 一四九・三八八 | 三五五 | 二 |
| 札幌改良八行 | — | — | — | — | — | 一・五八七 | — | — | — | — | 二二四・九一〇 | 二二四・九一〇 | 三四九 | — |

尚ほ左に熊岳城試驗農場に於ける試驗の結果を見るにフリント種にありては大金頂包米收量最も多くデント種にありてはホワイトデントコーン收量多く馬呀白包米之に次ぐ。

熊岳城試驗分場

| 品種＼成績 | 穀實反當收量 大正二年 | 大正三年 | 大正四年 | 大正五年 | 大正七年 | 大正十年 | 平均 | 穀實一升重量 大正二年 | 大正三年 | 大正四年 | 大正五年 | 大正七年 | 大正十年 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 馬呀包米 | 一・九九二石 | 一・二九八石 | 二・九一四石 | 三・〇八〇石 | 二・〇五〇石 | 二・五二〇石 | 二・三〇九石 | 三三九匁 | 三一九匁 | 三三八匁 | 三三八匁 | 三四七匁 | 三三〇匁 | 三三七匁 |
| 大金頂包米 | 一・三七一 | 二・一九六 | 二・四六四 | 二・五七五 | 一・九六〇 | 二・三五六 | 二・三二〇 | 三六三 | 三四二 | 三四九 | 三三五 | 三九一 | 三四六 | 三五四 |
| ホワイトフリント・コーン | 一・一六四 | 一・一八六 | 一・四八六 | 一・五二〇 | 一・二八〇 | 一・三五九 | 一・三三三 | 三四一 | 三五四 | 三五〇 | 三四八 | 三五〇 | 三八〇 | 三五一 |
| ホワイトデント・コーン | — | 二・三八四 | 三・八一六 | — | — | 二・五九五 | 二・九三六 | 三〇三 | 三〇三 | 三〇三 | — | — | 三一〇 | 三〇五 |
| 馬呀白包米 | — | 一・〇九三 | 三・九〇九 | — | — | 三・〇一五 | 二・六八四 | — | 三〇三 | 三〇七 | — | — | 三〇八 | 三〇六 |
| 紅包米 | — | 一・六七七 | 一・八二三 | — | — | 二・二七二 | 一・九二七 | — | 三三九 | 三五四 | — | — | 三三五 | 三四三 |

# 第二章　包米の產額と用途

## 第一節　滿洲に於ける包米の產額

滿洲に於ける包米の產額に就いては各人其の見る所を異にし其の數字は必ずしも一致しない、併しながら本作物が滿洲三大作物たる大豆、高粱、粟に次ぐ重要作物にして支那人の食料として重要せらるゝものにしてその作付收穫の如きも此等の作物に次ぐものなる事は一般に認められて居る。大正十四年度當課の推定に依れば包米の作付面積は次の如くである。

| | |
|---|---|
| 奉天省 | 四、〇八七、五〇〇反 |
| 吉林省 | 三、六〇四、四〇〇反 |
| 黑龍江省 | 一、九六一、五〇〇反 |
| 合計 | 九、六五三、四〇〇反 |

その作付面積は上記の如くである滿鐵農事試驗場に於ける品種試驗の結果に見るに一反歩當りの收量は品種により一樣でなく少きは一石五斗、多きは二石一斗以上であるが、本試驗の結果を滿洲各地に適用するには更に內輪に見積る必要があるから一段歩當り奉天省を一石二斗とし、吉林黑龍江の二省を一石一斗として計算すれば大體その產額は次の如き數字を示す。

## 滿蒙玉蜀黍生産高

| 省別 | 作付面積 | 反當收量 | 收穫高 |
|---|---|---|---|
| 奉天省 | 五、六八六、八〇〇反 | 一、二〇石 | 六、八二四、二〇〇石 |
| 吉林省 | 三、六四一、七〇〇 | 一、一〇 | 四、〇〇五、九〇〇 |
| 黑龍江省 | 一、七五八、八〇〇 | 一、一〇 | 一、九三四、七〇〇 |
| 合計 | 一一、〇八七、三〇〇 | — | 一二、七六四、八〇〇 |

即ち東三省の包米産額は一千二百七十六萬石餘にして滿洲農作物中第四位を占め其の産額は奉天省を第一位とし吉林、黑龍江省の二省此に次ぐ。

大正十五年支那側及日本側雙方の官廳及當業者の報告に基き當課に於て推定せる包米の作付面積を縣別に示せば次の如くである。

### 奉天省

| 縣名 | 作付面積 | 縣名 | 作付面積 | 縣名 | 作付面積 |
|---|---|---|---|---|---|
| 瀋陽 | 四三三、八〇〇反 | 嶺原 | 一一、〇〇〇反 | 錦遼陽 | 七八、〇〇〇反 |
| 營口 | 一、五〇〇 | 開 | 四、〇〇〇 | | 六〇、〇〇〇 |
| 海城 | 六、〇〇〇 | 東豐 | 三三一、三〇〇 | 新民 | 一、四〇〇 |
| 蓋平 | 二二、〇〇〇 | 江臨 | 一九、二〇〇 | 撫順 | 二一、六〇〇 |
| 義撫 | 三〇、〇〇〇 | 松莊 | 二三、〇〇〇 | 河 | 七四二、二〇〇 |
| 興城 | 三四、四〇〇 | 圖長 | 一二、〇〇〇 | 白 | 二八、〇〇〇 |
| 綏中 | 五五、二〇〇 | 東遼 | 三〇、〇〇〇 | 源 | 三三、〇〇〇 |
| 彰武 | 四、三〇〇 | 安洮 | 三〇、〇〇〇 | 南 | 二四、〇〇〇 |
| 盤山 | 三一、〇〇〇 | 泉昌 | 一三、七〇〇 | 圖 | 六五、九〇〇 |
| 錦西 | 一〇〇、〇〇〇 | 豐懷 | 二七〇、〇〇〇 | 德 | 二四、〇〇〇 |
| 遼中 | 九、〇〇〇 | 安梨 | 二四〇、〇〇〇 | 樹 | 六〇、〇〇〇 |
| 臺安 | 一、七〇〇 | 山法 | 七八、〇〇〇 | 庫 | 二、一〇〇 |
| 安東 | 一八八、〇〇〇 | 鎭康 | 三〇〇、〇〇〇 | 平 | 六、〇〇〇 |
| 桓仁 | 六六、〇〇〇 | 雙 | 九六〇、〇〇〇 | 山 | 三三、〇〇〇 |
| 通化 | 四六、八〇〇 | 龍 | 六〇、〇〇〇 | 廣 | 一〇、七〇〇 |
| 輯安 | 九四、二〇〇 | 城 | 二二〇、〇〇〇 | 開 | 五、六〇〇 |
| 輝南 | 三〇、〇〇〇 | 甸 | 一八八、六〇〇 | 通 | 三五、〇〇〇 |
| 岫巖 | 一九四、七〇〇 | 溪 | 二四、〇〇〇 | 遼 | 一五、〇〇〇 |
| 柳河 | 一七二、八〇〇 | 京 | 一一五、一〇〇 | 榆 | |
| | | | | 總計 | 五、六八六、八〇〇 |

吉林省

| 縣名 | 作付面積 | 縣名 | 作付面積 | 縣名 | 作付面積 |
|---|---|---|---|---|---|
| 雙城 | 四二四、八〇〇 | 依兰 | 五九、〇〇〇 | 總計 | 三、六四一、七〇〇 |
| 扶餘 | 三六、〇〇〇 | 額穆 | 一、四四〇、〇〇〇 | | |
| 濱江 | 二五、〇〇〇 | 敦化 | 二、二〇〇 | | |
| 德惠 | 一一五、二〇〇 | 寧安 | 一〇、八〇〇 | | |
| 雙陽 | 三三、〇〇〇 | 東寧 | 一〇二、二〇〇 | | |
| 盤石 | 九五、〇〇〇 | 琿春 | 四五、四〇〇 | | |
| 濱江 | 三二四、〇〇〇 | 延吉 | 五七、二〇〇 | | |
| 伊蘭 | 二二、七〇〇 | 阿城 | 二四四、八〇〇 | | |
| 長春 | 五三、三〇〇 | 同樂 | 五三、三〇〇 | | |
| 農安 | 五七、六〇〇 | 榆樹 | 五七、六〇〇 | | |
| 濱江 | 三五五、〇〇〇 | 五常 | 一六五、六〇〇 | | |
| 伊蘭 | 一四四、〇〇〇 | 賓縣 | 一四四、五〇〇 | | |
| 長春 | 一九三、三〇〇 | 吉林 | 三六七、〇〇〇 | | |
| 農安 | 一一六、四〇〇 | 安達 | 一四四、五〇〇 | | |
| 濱江 | 一〇八、〇〇〇 | 城子溝 | 一九三、三〇〇 | | |
| 伊蘭 | 一〇二二、二〇〇 | 賓縣 | 一六、四〇〇 | | |
| 長春 | 二、二〇〇 | 方正 | 一〇八、〇〇〇 | | |
| 濱江 | 四一、四〇〇 | 富錦 | 一一六、四〇〇 | | |
| 伊蘭 | 二一、七〇〇 | 虎林 | 一〇二二、二〇〇 | | |
| 長春 | 一〇、八〇〇 | 饒河 | 二、二〇〇 | | |
| 濱江 | 一一五、二〇〇 | 綏遠 | 四一、四〇〇 | | |
| 伊蘭 | 三三、〇〇〇 | 綏棱 | 一九、〇〇〇 | | |
| 長春 | 九五、〇〇〇 | 勃利 | 四二、〇〇〇 | | |
| 濱江 | 三二四、〇〇〇 | 同江 | 一九、〇〇〇 | | |
| 伊蘭 | 五七、二〇〇 | 清水 | 一、〇〇〇 | | |
| 長春 | 四五、四〇〇 | 江山 | 一七、三〇〇 | | |
| 濱江 | 二二、七〇〇 | 利川 | 五、八〇〇 | | |
| 伊蘭 | 五三、三〇〇 | 錦山 | 二二、九〇〇 | | |
| 長春 | 五七、六〇〇 | 遠清 | 三三、〇〇〇 | | |
| 濱江 | 三五五、〇〇〇 | 勃利 | 七、二〇〇 | | |
| 伊蘭 | 一四四、〇〇〇 | 利江 | 一三、〇〇〇 | | |

黑龍江省

| 縣名 | 作付面積 | 縣名 | 作付面積 | 縣名 | 作付面積 |
|---|---|---|---|---|---|
| 慶城 | 一〇八、〇〇〇 | 布西 | 一 | 總計 | 一、七五八、八〇〇 |
| 巴彥 | 三七、二〇〇 | 呼蘭 | 三二、四〇〇 | | |
| 海倫 | 四三、二〇〇 | 星林 | 八六、四〇〇 | | |
| 綏化 | 一八七、〇〇〇 | 旬泰 | 一四〇、〇〇〇 | | |
| 呼蘭 | 二五七、九〇〇 | 來克 | 六八、八〇〇 | | |
| 嫩江 | 一 | 山肇 | 三六、〇〇〇 | | |
| 青岡 | 三五、二〇〇 | 東安 | 六八、四〇〇 | | |
| 肇州 | 七二、〇〇〇 | 達呼 | 一、五〇〇 | | |
| 訥河 | 二六、一〇〇 | 倫望 | 六二、九〇〇 | | |
| 拜泉 | 二四、二〇〇 | 奎龍 | 一八、一〇〇 | | |
| 大賚 | 七二、〇〇〇 | 木蘭 | 一五〇、〇〇〇 | | |
| 龍江 | 五三、〇〇〇 | 西鎮 | 八六、四〇〇 | | |
| 總計 | 一、七五八、八〇〇 | 湯原 | 二八、八〇〇 | | |
| | | 通河 | 四〇、三〇〇 | | |
| | | 通北 | 一四、四〇〇 | | |
| | | 綏稜 | 一 | | |
| | | 嫩江 | 三、四〇〇 | | |
| | | 瑷琿 | 一、四〇〇 | | |
| | | 北安 | 四、二〇〇 | | |
| | | 嫩江 | 、四〇〇 | | |
| | | 烏雲 | 、四〇〇 | | |
| | | 濱河 | 一 | | |

參考の爲め滿洲包米の產額に關し從來發表された主なる統計を擧ぐれば次の如くである。

調査者別滿洲玉蜀黍生產額對照表

| | | | |
|---|---|---|---|
| 奉天省 | 滿蒙經濟要覽 | 大正三年調査 | 二、二六六、九一〇石 |
| | 滿蒙產業誌 | 大正五年調査 | 二、三一七、七五三 |
| | 關東軍資源調査班 | 滿蒙十三年鑑調 | 五、四三七、六〇〇 |
| 吉林省 | 滿蒙經濟要覽 | 大正三年調査 | 一、〇六六、二〇〇石 |
| | 滿蒙產業誌 | 大正五年調査 | 三、六〇三、七九七 |
| | 關東軍資源調査班 | 滿蒙十三年鑑調 | 三、〇一二、一二〇 |
| 黑龍江省 | 滿蒙經濟要覽 | 大正三年調査 | 二、二二六、四〇〇石 |
| | 滿蒙產業誌 | 大正五年調査 | 九七九、三三一 |
| | 關東軍資源調査班 | 滿蒙十三年鑑調 | 一、二二八、二六〇 |
| 三省合計 | 滿蒙經濟要覽 | 大正三年調査 | 五、五五九、五一〇石 |
| | 滿蒙產業誌 | 大正五年調査 | 六、九〇〇、八八一 |
| | 關東軍資源調査班 | 滿蒙十三年鑑調 | 九、六七七、九八〇 |

## 第二節　支那に於ける包米の產額

支那に果して幾何の包米の產額があるかに就いては信用するに足る統計がない。今中華民國農商部總務廳統計課の編纂になる農商統計表（第六次民國六年）に依り此を各省別に擧ぐると次の如くである。

全支那產額累年表

| 年次 | 作付面積 | 收穫高 | 當畝收量 |
|---|---|---|---|
| 大正三年 | 五一、七四五、三八二畝 | 四三、六四六、二五一石 | 〇、八四三石 |
| 大正四年 | 五二、四九三、九〇八 | 四四、七〇一、一九四 | 〇、七一五 |
| 大正五年 | 四五、八四六、九九一 | 三八、九〇〇、二八八 | 〇、八四八 |
| 大正六年 | 四二、二一六、二六七 | 三二、四一〇、九三二 | 〇、七六八 |
| 大正七年 | 五八、一九六、九八九 | 五七、一五〇、七八七 | 〇、九八二 |
| 大正八年 | 五〇、四五七、三四三 | 五四、二八四、九九三 | 一、〇七五 |

省別產額

| 省別 | 作付面積 | 收穫量 | 當畝收量 |
|---|---|---|---|
| 京兆省 | 二、五〇五、八四一畝 | 一、五二五、六六二石 | 〇、六〇九石 |
| 直隸省 | 五、六七二、四二八 | 二、六八九、八八五 | 〇、四七四 |
| 奉天省 | 四、五七八、九三二 | 三、二八七、九二八 | 〇、七一八 |
| 吉林省 | 三、〇〇二、三八二 | 一、二三四、二六六 | 〇、四一一 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 黑龍江省 | 三、八三七、〇九四 | 一、九七一、〇一八 | 〇、五一四 |
| 山東省 | 二、四三五、二〇二 | 三、二八七、五二二 | 一、二五〇 |
| 河南省 | 四、三二五、六六一 | 四、七五八、二二七 | 一、一〇〇 |
| 山西省 | 一、六二一、九〇〇 | 一、六〇九、〇四六 | 〇、九九二 |
| 江蘇省 | 四、三七九、七二四 | 四、六〇五、八八〇 | 一、〇五二 |
| 安徽省 | 三八四、九六九 | 三四六、四七二 | 〇、九〇〇 |
| 江西省 | 七八、一〇九 | 一一三、三三六 | 一、四五七 |
| 福建省 | 五、三八八 | 二、〇一五 | 〇、三七四 |
| 浙江省 | 一、四一六、四四二 | 一、五〇六、八四三 | 一、〇六四 |
| 湖北省 | 一、三八三、三四六 | 二、一四一、九八六 | 一、五四八 |
| 湖南省 | 一〇三、八一七 | 一四三、五一一 | 一、三八二 |
| 陝西省 | 一、七五七、二三一 | 一、〇八九、四八三 | 〇、六二〇 |
| 甘肅省 | 一、四〇四、〇一八 | 五二〇、八九〇 | 〇、三七一 |
| 新疆省 | 三、一一一、四九七 | 一、一七三、八三二 | 一、六六三 |
| 四川省 | — | — | — |
| 廣東省 | 三八、五四四 | 三〇八、四八三 | 八、〇〇三(?) |
| 廣西省 | — | — | — |
| 雲南省 | — | — | — |
| 貴州省 | — | — | — |
| 熱河省 | 一七三、九一八 | 九四、六三三 | 〇、五四四 |
| 綏遼 | 二四 | 四 | 〇、一六七 |
| 察哈爾 | — | — | — |
| 計 | 四二、二六七 | 三二、四一〇、九二二 | 〇、七六八 |

## 第三節　日本及朝鮮に於ける包米の產額

日本に於ける包米の作付面積は六萬町歩その產額は約七十萬石餘である近來の統計に見るに其の作付の增減は認められず現狀維持の狀態で將來に於ても此が增加を期待する事は出來ない。北海道に最も多く栽培せられ全產額の約四割は北海道の生產にかゝる。

朝鮮に於ける作付面積は最近に於ては九十萬町歩以上であるが、概ね地味惡しき土地に栽培せらるが故にその產額約五六十萬石餘に過ぎない。その中約八割五分は北朝鮮に栽培せらるる。就中最も多く栽培せらるゝは平安北道である。

作付は年々多少增加の傾向にあるが甚だ僅少で又將來に於ても此が增加はあまり期待する事が出來ない。

日本玉蜀黍作付面積收穫高累年表（農商務統計表）

| 年次 | 作付段別 | 收穫高 | 反當收量 | 價格 | 單價 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正十年 | 五、四四四・三町 | 六、五五、六七石 | 一・三四四石 | 三、六一四、四七円 | 四・六〇 |
| 大正十一年 | 五、八五三・四 | 六、五五、一五六 | 一・三〇 | 四、三四、〇四六 | 五・六 |
| 大正十二年 | 五、三三七・七 | 七四〇、六四一 | 一・三二五 | 五、九六四、六二 | 八・〇八 |
| 大正十三年 | 五、四四四・六 | 六四四、六〇九 | 一・三九 | 八、六七四、五三一 | 一三・五七 |
| 大正十四年 | 六、八七〇・五 | 七〇、六四八 | 一・六二 | 三、一七、六三五 | 一六・八七 |
| 大正十五年 | 六、三二一・四 | 七七、〇六六 | 一・三七 | 八、四三、六二 | 一〇・六 |
| 大正十六年 | 六、四六六・七 | 八六、四九二 | 一・三八 | 八、七九六、六二四 | 一〇・六三 |
| 大正十七年 | 五、一六・二 | 六五、二四 | 一・六一 | 六、四〇七、八 | — |
| 大正十八年 | 五、四三・一 | 六五、六九 | 一・七五 | 七、二七一、二七 | — |

大正十二年王朝黎作付面積及收穫高縣別表

| 縣名 | 作付面積 | 收穫高 | 反當收量 | 價格 |
|---|---|---|---|---|
| 青森 | 二一、九二一・七町 | 二七一、四二四石 | 一、二三八石 | 二、七七二、五六九円 |
| 北海道 | 四六〇・九 | 五、一〇二 | 一、一〇七 | 六二、六七三 |
| 岩手 | 三五五・一 | 五、二一七 | 一、四六九 | 四四、四八三 |
| 岐阜 | 三五七・六 | 三三、三〇四 | 一、一二九一 | 五七、八九三 |
| 長野 | 三三三・三 | 四、二〇四 | 一、二九一 | 六〇、八四七 |
| 山梨 | 二、二六四・〇 | 二九、七四九 | 一、三二四 | 三三六、三二一 |
| 福井 | 九〇・八 | 一、一七七 | 一、二九六 | 一四、五〇六 |
| 川崎 | 五一・六 | 四九四 | 〇、九五七 | 五、六六三 |
| 石川 | 二五・八 | 三二〇 | 一、二四〇 | 四、四八六 |
| 宮城 | 二〇八・五 | 二、〇七五 | 〇、九九五 | 二二、八〇八 |
| 富山 | 一二四・六 | 一、八五二 | 一、四八六 | 二五、六〇六 |
| 千葉 | 二六〇・七 | 六、八〇七 | 一、八八七 | 一一五、二八四 |
| 新潟 | 一、四三五・六 | 二九、五〇六 | 二、〇五五 | 二四九、八三五 |
| 群馬 | 一、五〇一・二 | 二、七三三 | 一、四四八 | 二三五、六〇〇 |
| 埼玉 | 一、三五五・三 | 一八、三九五 | 一、三五七 | 二三九、一三〇 |
| 栃木 | 七九六・三 | 一二、九四五 | 一、六二五 | 一六八、二八五 |
| 茨城 | 一、三四五・三 | 二三、五九八 | 一、七五四 | 二一九、七二九 |
| 千葉 | 七四七・七 | 八、三五八 | 一、一〇四 | 一一六、六七四 |
| 福島 | 一六六・三 | 一、六〇七 | 〇、九六六 | 二〇、一五一 |
| 山形 | 一六六・三 | 一、六二七 | 一、一二 | 一、六九二 |
| 秋田 | 四八六・三 | 一八、五八五 | 一、七二二 | 八五、三七五 |
| 宮城 | 二六一・〇 | 一、八八五 | 〇、七二二 | 二八、七七九 |
| 奈良 | 四六・三 | 八、〇三〇 | 一、六九二 | 八五、三七五 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 静岡 | 一、五七三・五 | 一七、五三八 | 一、一一四 | 二一四、二八六 |
| 愛知 | 二七八・四 | 三、一三七 | 一、一二七 | 三九、一七五 |
| 三重 | 九七・七 | 一、一〇六 | 一、一三二 | 一六、四三八 |
| 滋賀 | 五九・四 | 七〇九 | 一、一九四 | 一〇、〇四七 |
| 京都 | 一八・八 | 二〇五 | 一、〇九〇 | 三、九二四 |
| 大阪 | 二・八 | 四四 | 一、五七一 | 一、〇〇〇 |
| 兵庫 | 一七・〇 | 一八〇 | 一、〇五九 | 三、〇四一 |
| 奈良 | 六四・〇 | 七五六 | 一、一八一 | 九、九九七 |
| 和歌山 | 二二・五 | 一八〇 | 〇、八〇〇 | 二、七五六 |
| 鳥取 | 五八・七 | 六五二 | 一、一一〇 | 九、六三九 |
| 島根 | 二一六・五 | 二、四八五 | 一、一四七 | 二八、七二六 |
| 岡山 | 六六・三 | 六七六 | 一、〇二〇 | 八、五六二 |
| 廣島 | 八三・〇 | 一、〇三九 | 一、二五二 | 一一三、七五一 |
| 山口 | 一九・三 | 二二二 | 一、一五〇 | 三、二六一 |
| 徳島 | 三八八・四 | 五、二九一 | 一、三六二 | 五三、七〇五 |
| 香川 | 二一・七 | 一六四 | 〇、七五六 | 二、五三八 |
| 愛媛 | 五、六九九・九 | 四八、九一〇 | 〇、八五八 | 六七八、六〇八 |
| 高知 | 四、二〇八・六 | 三七、〇四二 | 〇、八八〇 | 五〇四、三五七 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 福岡 | 四六・七 | 五〇二 | 一、〇七五 | 四、九二六 |
| 佐賀 | 二二・〇 | 二〇四 | 〇、九二七 | 三、二九五 |
| 長崎 | 七三・八 | 七五四 | 一、〇二二 | 七、九九七 |
| 熊本 | 三、八〇三・九 | 二八、三五八 | 〇、七四五 | 三一四、六四三 |
| 大分 | 一、五九六・八 | 一二、四一五 | 〇、七七七 | 八〇、九五九 |
| 宮崎 | 二、二六七・八 | 二九、四五九 | 一、二九九 | 三五九、一三四 |
| 鹿児島 | 八六・〇 | 七七八 | 〇、九〇五 | 一〇、七二四 |
| 沖縄 | — | — | — | — |

朝鮮玉蜀黍作付面積及收穫高累年表（朝鮮總督府統計年報）

| 年次 | 作付面積 | 收穫高 | 反當收量 |
|---|---|---|---|
| | | | 石 |
| 大正六年 | 八三、一六〇・四町 | 五八四、六四三石 | 〇・七〇三 |
| 大正七年 | 八四、一八七・九 | 六一四、三〇三 | 〇・七三〇 |
| 大正八年 | 八九、四一五・〇 | 三九一、一二六 | 〇・四三七 |
| 大正九年 | 九一、一八九・九 | 六二六、一三五 | 〇・六八七 |
| 大正十年 | 九一、六九五・〇 | 六二〇、八四七 | 〇・六七七 |
| 大正十一年 | 九二、五九二・三 | 五六一、六八四 | 〇・六〇七 |

朝鮮玉蜀黍作付面積收穫高別表（大正十三年）

| 道別 | 作付反別 | 收穫高 | 反當收量 |
|---|---|---|---|
| | 反 | 石 | 石 |
| 大正十二年 | 九四、五八四・九 | 五四三、〇一一 | 〇・五七四 |
| 大正十三年 | 九三、四四五・七 | 四五九、六一三 | 〇・四九八 |
| 京畿道 | 三一五町四 | 一、七三三 | 〇・五四九 |
| 忠清北道 | 四五一・三 | 二、一九二 | 〇・四八六 |
| 忠清南道 | 三〇〇・三 | 一、六七九 | 〇・五五九 |
| 全羅北道 | 一六四・二 | 八〇二 | 〇・四八八 |
| 全羅南道 | 三七五・六 | 三、五八八 | 〇・九五五 |
| 慶尚北道 | 七九二・三 | 七、五二九 | 〇・九五〇 |
| 慶尚南道 | 二三八・〇 | 一、七六〇 | 〇・七三七 |
| 黄海道 | 三、四三二・一 | 一七、四四五 | 〇・五〇八 |
| 平安南道 | 一七、一二六・一 | 八七、七二五 | 〇・五一三 |
| 平安北道 | 五〇、九八四・三 | 二四四、四〇五 | 〇・四七九 |
| 江原道 | 一一、四二四・七 | 五九、一四四 | 〇・五一八 |
| 咸鏡南道 | 三、六二四・七 | 一八、七三九 | 〇・五一七 |
| 咸鏡北道 | 四、二一六・七 | 一二、七七二 | 〇・三〇三 |
| 總計 | 九三、四四五・七 | 四五九、六一三 | 〇・四九八 |

## 第四節　主要國に於ける包米の產額

其他各國に於ける包米の作付面積と生產額とを Annuaire International de Statistique Agricole. に依つて示すと次の如くである。

主要國包米產額

| 種別 / 年次 / 國名 | 作付面積 一九一九 | 作付面積 一九二〇 | 作付面積 一九二一 | 生產額 一九一九 | 生產額 一九二〇 | 生產額 一九二一 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | Hectares | | | Quintals | | |
| イスパニア | 四七七、二六二 | 四七二、六三一 | 四七六、五三六 | 六、四九一、三三六 | 七、〇三四、二二六 | 六、三二四、二七一 |
| セルビア | — | 一、八二五、二九〇 | 一、九〇四、五一八 | — | 二五、六八九、九六三 | 一八、九二九、三三六 |
| ハンガリー | — | 八、六〇九六 | 八、六六、三九一 | — | 一二、七四〇、二九五 | 六、八九四、四三五 |
| イタリー | 一、五三〇、九一〇 | 一、三〇二、〇〇〇 | 一、五〇〇、〇〇〇 | 二、三二、六〇〇 | 二二、六八三、〇〇〇 | 二四、〇〇〇、〇〇〇 |
| ルーマニア | 二、七三二、二四九 | 三、二九五、四一八 | 三、四四三、九九〇 | 三五、九〇五、五八 | 四六、一三八、四六八 | 二七、三五五、六六九 |
| ロシア | — | 九六〇、六〇五 | — | — | — | — |
| アメリカ | 三九、三三三、七二七 | 四一、二五六、五六八 | 四一、〇二七、〇五六 | 七二五、三七二、九三五 | 八二〇、五八七、四三三 | 七八二、六六八、五六七 |
| エジプト | 七三五、二六九 | 七六四、二六一 | — | 一六、二五〇、七七〇 | 一七、九二五、二七三 | — |

| アルゼンチン | 三、三三、〇〇〇 | 三、二五三、九〇〇 | 六五、七一〇、〇〇〇 | 五八、三四〇、〇〇〇 |
|---|---|---|---|---|

## 第五節　包米の用途

滿洲の南滿地方では土人は此を常食とする、粒を磨にて挽き粉末とし此れより餅或は饅頭等となし食料に供する餅樣のものを餅子と云ひ、饅頭樣のものを饅頭その中に肉又は野菜の類を包みたるものを包子と云つて居る。包米を挽きて粉末としたるものを包米麵と謂ひ綠豆高粱等の麵(粉の意)等と同じく此より粉條兒を製するが粉條兒は黃色を呈する。日本で此れを食料に供する所では單に引き割り又は水に浸して搗き外皮を去つて引き割り飯に炊いて食する。又粉末として、小麥粉に混し麵包とし又菓子の原料としても用ひられる。尙ほ此れより澱粉を製する事が出來るが此の澱粉粒は甚だ細少で品質も優良である。又ウイスキー麥酒等の釀造原料としても使用せられる。焙炒して珈琲の代用にする事もあると云ふ。發芽せしめて油を搾取するが油る得を割合は一割五分位である。尙ほ家畜の飼料として用ひらるゝ外未熟のものは熬り又は煮て食す。

稈及葉は靑刈として飼料に供せらるゝ、滿洲に於ては稈は高粱稈と共に滿洲農家の重要燃料たる外黑基西哥にては稈の液より一種の酒を製すると云ふ。又稈は比較的糖分を含有することが多いから此より砂糖を製することも出來ると謂ふけれ共企業としては採算が立つとは思はれない。

穗心は燃料に供する外『コルク』の代用とせらるる。包皮は果實等を包裝するに用ひらるゝの外椅子蒲團枕等の充



塡の爲めに用ひらる。

尙ほ包米が澱粉製造原料として最好適品であることは前述した通りであつて米國に於てはコーンスターチ工業は甚だ盛である。滿洲に於ても滿洲澱粉工業會社が主として包米を原料として澱粉の製造を爲して居たが目下事業不振にして休業中である。其の他包米を原料として澱粉を製造せんとする、大工場の計畫もあつたが終に實現に至らずして止ん、然し乍ら十分の資金と綿密なる計畫とを以てすれば決して採算の取れない事業ではあるまい。

參考の爲め滿鐵中央試驗場に於て滿洲產包米を分析せる結果を粟、米、高粱に對比すれば次の如し。

| 品名 | 水分 | 粗脂油 | 粗疋白質 | 澱粉 | 糖分 | 糊精 | 粗纖維 | 灰分 | 燐酸 | 加里 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 包米 | 一四・四八 | 一・九九 | 七・一六 | 六八・五八 | 一・九 | 一・二五 | 二・三一 | 一・七八 | 〇・六三 | 〇・三三 |
| 粟 | 九・九二 | 三・四五 | 七・七三 | 七・二六 | 〇・九六 | 四・二一 | 〇・八八 | 一・六〇 | 〇・七八 | 〇・一八 |
| 米 | 一一・五二 | 一・四九 | 八・二三 | 六八・五五 | 四・〇九 | 三・五五 | 一・六八 | 一・三〇 | — | — |
| 高粱 | 一三・七五 | 三・八五 | 一〇・四〇 | 六六・一六 | 一・三六 | 一・一三 | 二・〇九 | 二・二七 | 〇・九一 | 〇・四四 |

# 第三章　滿洲包米の集散と取引

## 第一節　包米の出廻り狀況

滿洲に於ける包米の分布狀況は此を前述したが此が出廻り狀況は人口の粗密其他地方消費の多少に影響せられて必ずしもその分布狀況に一致するものではない。而して此が出廻りは鐵道の輸送統計に依つて知るの外はないのであるが次に鐵道の輸送統計に依つて見る事とする。

包米出廻りの時期は各地方に依つて一樣でないが一般に言へば南部に於ける出廻りが稍早く北上するに從つてその出廻りも次第に遲れる。市場に『ハシリ』を見るのは九月下旬頃からであるが稍出廻りの旺盛に向ふのは十一月上旬頃からで結氷期間にその大部分は各市場へ出廻り終る事は他の穀物と異る所はない。

### 第一項　南滿に於ける出廻り狀況

南滿に於ける包米の出廻り狀況を滿鐵の輸送統計に依つて示せば次の如くである。

開港向包米發送高驛別表　（自四月至翌年三月）

| 發驛／到着港 | 年度 | 大正八年度 | 大正九年度 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 | 大正十四年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 達陽 | 大連 | 噸一 | 噸三 | 噸一 | 噸一五〇 | 噸三六 | 噸一三九 | 噸六七 |
| | 營口 | 二四 | 五〇 | 一七〇 | 八六 | 三九 | 二六〇 | 一、二九九 |
| | 安東 | — | — | — | — | — | — | — |
| | 其他 | 一二 | 二 | 八 | — | 三九 | 一七 | 二四 |
| | 合計 | 一三五 | 六四 | 一七八 | 二三五 | 一二四 | 五六六 | 一、三八九 |
| 撫順 | 大連 | 八四一 | 三五二 | 一、六四一 | 七二三 | 二四一 | 四三九 | 一、〇六一 |
| | 營口 | 四三 | 八四一 | 六六一 | 七〇 | 一〇 | 三八 | 一〇七 |
| | 安東 | 二二〇 | — | — | 一 | 六六 | 三 | — |
| | 其他 | 九七 | 二六〇 | 一四四 | 一〇 | 三八 | 三九 | 一五九 |
| | 合計 | 一、三〇一 | 一、四七三 | 二、四四六 | 七九三 | 三五六 | 五四七 | 一、三二七 |
| 奉天 | 大連 | 四、一七七 | 一、八〇五 | 二、三五九 | 四、八四六 | 三、二四〇 | 三、二三四 | 一、八四九 |
| | 營口 | 一〇三 | 五一四 | 四三 | 一九〇 | 二六 | 五三 | 三〇三 |
| | 安東 | 四八二 | — | — | 四 | 三三 | — | — |
| | 其他 | 三、七七六 | 五二〇 | 一九 | 八 | 一、七九 | 二、二三 | 六三 |
| | 合計 | 八、五三六 | 二、八三九 | 二、四一三 | 五、〇四八 | 四、四七七 | 五、五九九 | 二、二一五 |

| 雙 | 圖 | 原 | 鐵 |
|---|---|---|---|
| 大 | 合 | 合 | 合 |
| 連 | 計 | 計 | 計 |
| 四 | 二八三 | 四九〇 | 三五七 |
| | 二四三 | 一六〇 | 二四三 |
| | 二一一 | 二〇三 | 三六三 |
| | 四 | 四 | 四 |
| 六三 | 八四〇 | 七六三 | 一四六 |
| 八 | 一二七 | 八五七 | 一四三 |
| | 九七 | 一 | 六四 |
| 二五 | 二四一 | 三六八 | 一〇〇 |
| 一 | 一 | 四七二 | 一 |
| | 一 | 一 | 一 |
| | 一 | 一 | 一 |
| 二四二 | 三六七 | 四〇二 | 一四八 |
| | 一 | 四六二 | 一 |
| | 一 | 一 | 一 |
| | 一 | 一 | 一 |
| | 三六八 | 一八〇 | 一八六 |
| | 一 | 二六〇 | 九 |
| | 一 | 一 | 一 |
| | 一 | 一 | 一 |

滿洲包米に關する調査

| 部 | 繭 | 街 | 子 | 順 |
|---|---|---|---|---|
| 營 | 合 | 合 | 合 | 合 |
| 大 | 計 | 計 | 計 | 計 |
| 連 | 四九五 | 七〇六 | 二二 | 一 |
| | 二三一 | 二四三 | 一二 | 一 |
| | 一七〇 | 二六二 | 二七 | 一 |
| | 三 | 三 | 一 | 一 |
| 三六三 | 二四六 | 二〇三 | 六〇 | 一 |
| 二六八 | 二四六 | 二四三 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 三六三 | 二四六 | 二四三 | 六〇 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 二四七 | 二四六 | 二四三 | 六〇 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |

| 營 | 繩 | 洮 | 四 |
|---|---|---|---|
| 大 | 合 | 合 | 合 |
| 連 | 計 | 計 | 計 |
| 三六三 | 三六四 | 三六八 | 二四六 |
| 一 | 一七二 | 二四六 | 一 |
| 一 | 一七〇 | 二四六 | 一 |
| 三 | 三 | 三 | 一 |
| 二六七 | 二六八 | 二六八 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 |
| 二四七 | 二四六 | 二四六 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 |
| 二四七 | 二四六 | 二四六 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一 | 一 | 一 | 一 |

滿鐵他米の種類と取引

| 驛名 | 他 | 其 | 安 | 營 | 大 | 東 | 口 | 連 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 安營大東口連 | 二〇、三五四 | 九、〇二二 | 九、五三六 | 二、四六、九九一 | 一、五五、五五六 | 三、二六、七七五 | 二、九三、五七〇 | 六、六九、〇六三 |
| 長春打切 | 二七一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 合計 | 二七一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 其他 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 安東 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 營口 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 大連 | 六六 | 二四九 | 四六 | 四四三 | 四四七 | 四四七 | 四四七 | 四四七 |
| 長春合計 | 二七一 | 九〇二 | 三五九 | 三五〇 | 四七八 | 四七八 | 四七八 | 四七八 |
| 其他 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 安東 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 營口 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 大連 | 六六 | 二四九 | 四六 | 四四三 | 四四七 | 四四七 | 四四七 | 四四七 |
| 吉林合計 | 二五三 | 一、六六八 | 八〇一 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 |
| 其他 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 安東 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 營口 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 大連 | 二九 | 八六 | 二、一〇 | 八四〇 | 三九五、三七七 | 二七 | 二七 | 二七 |
| 合計 | 二、三五、三五 | 二、四四、九九 | 七五、一五一 | 六四、九四 | 三、四二、三五 | 二、〇四、三五 | 一、五四、二六六 | 一、五四、二六六 |
| 其他 | 六四 | 七五、一五一 | 二、〇四、一 | 三、〇二、九九 | 三、〇二、九九 | 二、〇四、一 | 一、〇四、一 | 一、〇四、一 |





| 驛名 | 他 | 其 | 安 | 營 | 大 | 東 | 口 | 連 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 安營大東口連 | 二、〇三五 | 九、〇二二 | 九、五三六 | 二、四六、九九一 | 一、五五、五五六 | 三、二六、七七五 | 二、九三、五七〇 | 六、六九、〇六三 |
| 長春合計 | 二七一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 其他 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 安東 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 營口 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 大連 | 六六 | 二四九 | 四六 | 四四三 | 四四七 | 四四七 | 四四七 | 四四七 |
| 吉林合計 | 二五三 | 一、六六八 | 八〇一 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 |
| 其他 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 安東 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 營口 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 大連 | 二九 | 八六 | 二、一〇 | 八四〇 | 三九五、三七七 | 二七 | 二七 | 二七 |
| 合計 | 二、三五、三五 | 二、四四、九九 | 七五、一五一 | 六四、九四 | 三、四二、三五 | 二、〇四、三五 | 一、五四、二六六 | 一、五四、二六六 |
| 其他 | 六四 | 七五、一五一 | 二、〇四、一 | 三、〇二、九九 | 三、〇二、九九 | 二、〇四、一 | 一、〇四、一 | 一、〇四、一 |

| 驛名 | 他 | 其 | 安 | 營 | 大 | 東 | 口 | 連 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 安營大東口連 | 二、〇三五 | 九、〇二二 | 九、五三六 | 二、四六、九九一 | 一、五五、五五六 | 三、二六、七七五 | 二、九三、五七〇 | 六、六九、〇六三 |
| 長春合計 | 二七一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 其他 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 安東 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 營口 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 大連 | 六六 | 二四九 | 四六 | 四四三 | 四四七 | 四四七 | 四四七 | 四四七 |
| 吉林合計 | 二五三 | 一、六六八 | 八〇一 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 |
| 其他 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 安東 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 營口 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 大連 | 二九 | 八六 | 二、一〇 | 八四〇 | 三九五、三七七 | 二七 | 二七 | 二七 |
| 合計 | 二、三五、三五 | 二、四四、九九 | 七五、一五一 | 六四、九四 | 三、四二、三五 | 二、〇四、三五 | 一、五四、二六六 | 一、五四、二六六 |
| 其他 | 六四 | 七五、一五一 | 二、〇四、一 | 三、〇二、九九 | 三、〇二、九九 | 二、〇四、一 | 一、〇四、一 | 一、〇四、一 |

| 驛名 | 他 | 其 | 安 | 營 | 大 | 東 | 口 | 連 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 安營大東口連 | 二、〇三五 | 九、〇二二 | 九、五三六 | 二、四六、九九一 | 一、五五、五五六 | 三、二六、七七五 | 二、九三、五七〇 | 六、六九、〇六三 |
| 長春合計 | 二七一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 其他 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 安東 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 營口 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 大連 | 六六 | 二四九 | 四六 | 四四三 | 四四七 | 四四七 | 四四七 | 四四七 |
| 吉林合計 | 二五三 | 一、六六八 | 八〇一 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 | 三九五、三七七 |
| 其他 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 安東 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 營口 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 大連 | 二九 | 八六 | 二、一〇 | 八四〇 | 三九五、三七七 | 二七 | 二七 | 二七 |
| 合計 | 二、三五、三五 | 二、四四、九九 | 七五、一五一 | 六四、九四 | 三、四二、三五 | 二、〇四、三五 | 一、五四、二六六 | 一、五四、二六六 |
| 其他 | 六四 | 七五、一五一 | 二、〇四、一 | 三、〇二、九九 | 三、〇二、九九 | 二、〇四、一 | 一、〇四、一 | 一、〇四、一 |

| 線他及 | 其他 | 合計 | 合計 | 大連 | 營口 | 安東 | 其他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 西部線 | 九、六九 | 三九、六六 | 九、四四 | 五六、六八 | 一、四四 | 一〇、七九 | 三四、三九 | 二六、六六 |
| 哈爾賓管區 | 四、九一四 | 九、一八四 | 二六、六六 | 五七、〇四〇 | 八、三五 | 一、四四四 | 四九、六七五 | 二六、六六 |
| 哈爾賓管區 | 四、四五五 | 二一、四七二 | 二四、八四 | 一一八、二七三 | 二八、六六六 | 八 | 三七、二一 | 二七、八四 |
| 哈爾賓管區 | 三、七二三 | 四六、〇四三 | 三九、〇三〇 | 二二、四七六 | 五、四九一 | 二〇一 | 一〇、六六五 | 一〇、六六〇 |
| 哈爾賓管區 | 五、七二一 | 三、七二一 | 四六、六六 | 六、二四四 | 三、七二二 | 四六三 | 二六、六九 | 三四、二九 |
| 哈爾賓管區 | 八、三九 | 四〇、七〇九 | 一四、三四八 | 一九、七二五 | 一、四四八 | 一、二四八 | 三四、〇七四 | 四〇、七〇九 |
| 哈爾賓管區 | 六、二一三 | 三七、八六六 | 一九、四二一 | 一九、四二一 | 三〇一 | 一、〇〇〇 | 三、〇七三 | 一四、三七〇 |

第二項　北滿に於ける包米の出廻

東支鐵道の穀物輸送統計に依つて北滿地方に於ける包米の出廻狀況を見るに年に依つて甚だしき變化があるが大體に於て漸次その數の增加しつゝある事を認むる事が出來る。

東支鐵道包米發送數量（東支鐵道穀物輸送統計表）

| 發送 | 一九二〇年 | 一九二一年 | 一九二二年 | 一九二三年 | 一九二四年 | 一九二五年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 西部線 宮拉爾吉 | 二〇、六六〇布度 | 七四、三四〇布度 | 八、三六〇布度 | 二九、六九五布度 | 九、六六五布度 | 二七、七四六布度 |
| 哈爾賓 小河子 | 三、四九 | 三、四〇一 | 三、〇六四 | 四、四六六 | 六、六九九 | 四、一四一 |
| 哈爾賓 滿洲里 | 一、三一六 | 一〇、四八九 | 六、一六六 | 一、六六九 | 一、六一一 | 七、一五九 |
| 哈爾賓 齊齊哈爾 | 七、四八一 | 六五、〇四一 | 二七、六八一 | 一〇、九七四 | 四〇、七四四 | 七〇、九六六 |
| 哈爾賓 對青山 | 一、〇一一 | 一、〇一〇 | 一一、六四四 | 一一、一四四 | 一一、一六四 | 六三、六八八 |
| 哈爾賓 其他 | 四〇 | 八、七四一 | 三六、八六 | 三一、七四二 | 一七、六四〇 | 一六、八一四 |
| 哈爾賓管區合計 | 一三六、七五六 | 一六四、一六二 | 六六四、一八二 | 五一四、五三四 | 一六四、一〇一 | 一、三四〇、一四一 |
| 哈爾賓管區 哈爾賓 | 五、四八三 | 一一、三五六 | 二、〇七五 | 五九三 | 二、八〇〇 | 四、八九 |
| 哈爾賓管區 哈市八區 | 九、四一 | 一七、八六 | 三一、四九六 | 二、〇四 | 三七、三八四 | 一〇一、四二二 |
| 哈爾賓管區 其他 | 三、四二二 | 一 | 一 | 一三三 | 一六八 | 四五、七六〇 |
| 哈爾賓管區合計 | 一七、九三六 | 二、一二一 | 三五、一四六 | 二、七六六 | 四〇、三六二 | 一五三、九三四 |
| 東部線 吉林 | 四、二四〇 | 六、〇六二 | 六、四四六 | 一〇一 | 三六 | 四七、七七九 |
| 東部線 吉林 烏拉街 | 四〇、五四六 | 一七五、一一三 | 八六、一二四 | 二七 | 一、四〇七 | 一二三、四九二 |
| 東部線 吉林 海龍 | 二四〇、〇六六 | 五七、一一三 | 四〇、八〇五 | 一、二〇六 | 八、七六六 | 八五、六四四 |
| 東部線 吉林 面坡 | 五二 | 五一 | 一四四 | 一一四 | 一四一 | 四七、一四一 |
| 東部線 吉林 牡丹江 | 一 | 五六 | 一四四 | 三三 | 三六六 | 五六、六六 |

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 穆稜 | 一、二四六 | 一、九四八 | 四六 | 七 | 一九五 | 二二 | 七 |
| イリンスキー | 二、三三五 | 四、〇七六 | 六七 | 三 | 六〇 | 九九 | 二、一七 |
| 馬橋河 | 四、〇〇七 | 二六、六三二 | 六九八 | 一、五一七 | 七七四 | 一八、九〇九 | 一〇〇、五三〇 |
| 其他 | 二、八八七 | 三九、九五六 | 六一、三一七 | 一、七九八 | 一七、三七六 | 三一、五七四 | 三四八、三六七 |
| 東部線合計 | 七九、三六四 | 三二一、五五九 | 一九五、七九四 | 一七、三七六 | 五九四、四六一 | 三一、五七四 | 三四八、三六七 |
| 南部線 雙城堡 | 三、四八七 | 五、九八九 | 五、〇七五 | — | 六七、四一五 | 六、〇〇〇 | 四六三、九七一 |
| 陶賴昭 | 五、三三三 | — | 三、六六三 | 一、〇〇〇 | 五七、七一四 | 一五六、七九一 | 二〇九、三七一 |
| 窰門 | 九、〇〇九 | 四、〇〇一 | 三六一、五八一 | 四九一 | 二、〇三二 | 八三、一八一 | 一五三、六八九 |
| 其他 | 一、六八六 | — | 四九一 | 二、〇三二 | 六〇、一八五 | 二六七、三六三 | 八七九、七一四 |
| 南部線合計 | 一九、五〇二 | 一〇〇三〇 | 三七一、一八六 | 六〇、一八五 | 五九四、四六一 | 二六七、三六三 | 五〇三、三五一 |
| 東支發總合計 | 二五二、五七四 | 七一四、一六二 | 一、三五八、七四四 | 一七、三七六 | 五九四、四六一 | 五〇三、三五一 | 二、六三二、一四一 |

## 第二節　滿洲主要市場に於ける包米の集散と取引

### 第一項　遼陽

集散狀況　包米は八月下旬乃至九月上旬頃より收穫に着手するものなれば生産量多き地方に於ては直ちに脱穀調製を行ない市場に搬出するも生産少なき地方に於ては收穫後直ちに穀脱を行なはず收納舍又は天井裏等に貯藏し置き冬季閑暇を利用して順次脱穀調製後市場に搬出するを普通とするを以て十月上旬より一月前後迄が馬車出廻りの盛期である。試みに遼陽城内に於ける包米取引商の月別買入高を示せば次の如くである。（大正十二年度）

| 店名＼月次 | 一月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 義順園 | 二〇支石 | 一五〇支石 | 一三〇支石 | 八〇支石 | 三八〇支石 |
| 慶謙祥 | — | 一二〇 | 一二〇 | 一二〇 | 三六〇 |
| 長發永 | 三〇 | 一一〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 三四〇 |
| 義鳳昌 | 一〇 | 一二〇 | 一〇〇 | 九〇 | 三一〇 |
| 利興順 | — | 一四〇 | 一二〇 | 七〇 | 三三〇 |
| 萬盛福 | — | 九〇 | 一二〇 | 九〇 | 二八〇 |
| 福德長 | — | 四〇 | 一三〇 | 三〇 | 二〇〇 |

（備考　表記外の月は買入なし）

當地包米取扱業者は普通包米製粉を兼營し自家販賣一箇年の製粉量を豫測し是に足る包米を殘し殘餘は他の製粉業者に賣り拂ひ或は他地方に移出する。尙ほ當城内に來集する包米量は一箇年平均四千五百支石乃至五千支石内外にしてその大半以上は本縣下産のものにして他地方より移入さるゝものは僅少である。

遼陽驛に到着する包米の數量はもとより年に依り一樣でないが大正十二年度に於ては九十八噸大正十三年度に於ては百二十六噸で普通發送高を超過する事はない。此等到着包米の發驛は奉天以北の各驛にして四平街公主嶺等が主なるものである。

遼陽驛に於ける包米の發送噸數も近年漸次增加の傾向にありその仕向地は營口仕向のものが最も多い次の如し。

包米發送高仕向地別表（單位噸會社年度）

| 仕向地＼年次 | 大正八年度 | 大正九年度 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 | 大正十四年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大連 | 二 | 三 | — | 一五〇 | 三六 | 一三六 | 六七 |
| 營口 | 一四 | 五〇 | 一七〇 | 八五 | 三九 | 二六〇 | 一、二九九 |
| 安東 | — | — | — | — | — | — | — |
| 其他 | 一二三 | 一一 | 八 | — | 三九 | 一七一 | 二三 |
| 合計 | 一三九 | 六四 | 一七八 | 二三五 | 一一四 | 五六六 | 一、三八九 |

取引慣習　生産者は脱穀調製後見本品を城内市場に携帶し又は直接取扱店に行き商談の上賣買契約成立すれば現品を市場に搬出する。其際所謂仲買商人の手にて桝量を計り買主に相當代價を支拂はしむる。建値單位及取引單位は共に一支斗であつて取引貨幣は奉天票を以てする。

税金として生産者は賣價百元に付き六角を買主は買價百元に付き五角計一元一角を納入し尙ほ生産者は仲買人に桝錢（測錢）を支拂ふ。

## 第二項　奉天

集散狀況　當市場への馬車出廻高に就いては確實なる統計の據る可きものがないが一箇年平均十五萬支石内外と稱されて居る。十三年中のものを支那税捐局に就いて調査すると約六萬八千石餘なるが同年は偶々奉直戰爭があつて出廻數量も甚だしく減退したのである。

當地馬車出廻りの奥地市場は瀋陽を初め鐵嶺、新民、遼中、遼陽、撫順、興京等がその主なるものである。

汽車に依つて奉天驛に到着する包米の數量は年に依つて一樣でなく最近數年間に於ける數量を示すと次の如くである。（會社年度）

| 大正六年度 | 大正七年度 | 大正八年度 | 大正九年度 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一六、六六噸 | 七、四四三噸 | 一一噸 | 三五、四六八噸 | 二、二八九噸 | 二、一〇四噸 | 四三二噸 | 七、五六二噸 |

以上到着包米の發驛は開原、四平街、公主嶺、范家屯等である。

奉天驛に於ける發送數量を仕向地別に見ると大部分は大連仕向のもので次の如くである。

奉天驛包米發送噸數累年（會社年度）

| 年次＼仕向地 | 大連 | 營口 | 安東 | 其他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正八年度 | 四、一七五噸 | 一〇三噸 | 四八二噸 | 三、七七六噸 | 八、五三六噸 |
| 大正九年度 | 一、八〇五 | 五一四 | — | 五二〇 | 二、八三九 |
| 大正十年度 | 二、三三五 | 四三 | — | 一五 | 二、四一三 |
| 大正十一年度 | 四、八四六 | 一九〇 | 四 | 八 | 五、〇四八 |
| 大正十二年度 | 三、二四〇 | 二五 | 三三 | 一、一七九 | 四、四七七 |
| 大正十三年度 | 三、二二四 | 五三 | — | 二、一二二 | 五、三九九 |
| 大正十四年度 | 一、八四九 | 三〇三 | — | 六三 | 二、二一五 |

包米發着比較（會社年度）

| 發着＼年次 | 大正六年度 | 大正七年度 | 大正八年度 | 大正九年度 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 發送 | 二、八〇六噸 | 一、四八九噸 | 八、五三六噸 | 二、八三九噸 | 二、四一三噸 | 五、〇四八噸 | 四、四七七噸 | 五、三九九噸 |
| 到着 | 一六、三八六 | 七、四四三 | 一〇二 | 三五、四六八 | 二〇、一四九 | 二、一〇四 | 四三〇 | 七、五六二 |
| 差引發送超過 | (−)一三、五七八 | (−)五、九五四 | 八、四三四 | (−)三二、六二九 | (−)一七、七三六 | 二、九四四 | 四、〇四七 | (−)二、二三 |

右の如く包米の發着數量を比較して見ると年に依つて一樣でないが移出餘力は多く此を期待する事は出來ないので奉天城内を控へる關係上他の穀物と同樣むしろ包米の消費地であると謂はねばならぬ。

取引慣習　奉天に於ける包米の取引慣習は一般雜穀と何等異なる所なきを以て支那側に於ける雜穀取引慣習に就いて概說すれば次の如くである。

當市場取引は現金現物を主とし建値は一支斗小洋建である。

雜穀の取扱業者は此を分つて粮棧、粮店、粮米舖の三種とすることが出來る。

粮棧は資本規模共に廣大にして主として自己の計算を以て賣買し客の委託に依る事は少ない。專ら當地への出廻品を購入し或は他地方へ店員を派して購入し之を院内に囤積し隨時相場の採算を見て大口發賣をなし小賣を爲さない。此の種の商店は現在奉天に大西關、大南關、小西關に各一戸づゝあるに過ぎない。

粮店は一種の問屋にして客の委託に依り雜穀を賣買し自己の計算を以てせず。此の種の粮店は現に三十戸餘ある鄉村の農民の馬車積にて來城するものは先ず粮店に宿泊し賣却を委託する。店員は見本を以て粮市に赴き買手を物色する。（粮市は小北門内にあり朝六時より九時まで開市す）取引成立すれば農民は馬車を以て買主の宅に送致し粮店は此を計量して現品を買手に引渡すのである。此の際外櫃（外務店員）は客に代つて代金を受領し又稅金を代納するものである。而して粮店の手數料は次の如くである。

| 口錢 | 賣主負擔 |
|---|---|
| 每一斗一分五厘 | |

斗量費　毎一斗一分五厘　賣主負擔

粮米舖は純然たる小賣商店なるが時に大規模なるものは一箇年の所要數量を一時に購入することがある。

海關稅　輸出稅として百斤に就き海關兩〇・一兩出產稅、正稅從價百分の一外に賦課稅として正稅の十分の一（賣買主半折負擔）

## 第三項　開原

集散狀況　開原は高粱、大豆等特產物に於けると同樣又包米の大市場にしてその來集高の如きも他市場に比すれば巨額に達す。此が背後に於ける奧地出廻り圈內を見るに東は海龍縣、西安、西豐、東豐の諸縣、西は雙樓臺、通江口等となす事を得るが就中東方より來るものが多い。試みに最近の馬車出廻り高を開原取引所月報に依つて見るこ次の如くである。

馬車糧豆現物取引出來高表（單位石）

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十一年 | 一〇、四八四 | 一〇、〇五五 | 八、七五七 | 五、三三〇 | 七三三 | 三四九 | 四三 | — | — | — | 六、八七六 | 三三、二八 | 七四、八八 |
| 大正十二年 | 一七、六八〇 | 七、三二一 | 三、五一六 | 三、一〇六 | 一二九 | 一二 | — | — | 二三 | 一七四 | — | 三、六五一 | 三一、五一三 |
| 大正十三年 | 三、〇三三 | 二、八三四 | 二、六八七 | 八九 | 六九〇 | 二六四 | 三〇 | 三六 | 二五 | 一六 | 一〇、八五三 | 一九、六八一 | 四四、一三九 |

次に鐵道に依る發送を見るに年に依つて變化はあつて次の如くである。

開原包米發送高累年表（單位噸　會社年度）

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十四年 | 一四、五六五 | 二二、六三九 | 一、五五三 | 二九〇 | 三一〇 | 一、二五六 | 六三五 | 六一、七八三 | — | 三六 | 八、〇四五 | 三三、一〇二 | 一三四、三三三 |
| 大正十五年 | 四〇、〇一九 | 八、三四八 | 二、三六九 | 九七二 | 一、〇五二 | 二六三 | 五七 | — | — | — | 二八一 | — | 五三、三六〇 |
| 大正七年度 | 一四、九八六 | 一七、二九三 | 四五、七一〇 | 一〇、六六三 | 八五、五一七 | 二三、二〇四 | 五三、六八八 | 六一、五三八 | | | | | |
| 大正八年度 | 大正九年度 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 | 大正十四年度 | | | | | | | |

此を仕向港別に表示すれば次の如し。

| 年次＼仕向港 | 大連 | 營口 | 安東 | 其他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正十年度 | 五四、一五六 | 八、三三二 | — | 八、一七五 | 七一、六六三 |
| 大正十一年度 | 八二、〇七五 | 一、二六八 | — | 二、一七四 | 八五、五一七 |
| 大正十二年度 | 一九、三二七 | 四一九 | 六六 | 三、三九二 | 二三、二〇四 |
| 大正十三年度 | 四〇、一二九 | 三、一六二 | 一七三 | 一〇、二二四 | 五三、六八八 |
| 大正十四年度 | 四九、六三六 | 八、二九二 | 一〇〇 | 三、六一〇 | 六一、五三八 |

包米の發送は十二月頃より增加し翌三四月頃までが發送の最も旺盛な時期である。

包米發送高月別表（取引所月報　生産年度）

| 年次＼月別 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十一年度 | 三三〇噸 | 四、三八九噸 | 一四、四八六噸 | 二二、七〇五噸 | 一九、〇七四噸 | 一五、一二四噸 | 七、九八六噸 | 二、八七六噸 | 一、九二四噸 | 二三一噸 | 七九五噸 | 一三、五九六 | 七九、三三九噸 |
| 大正十二年度 | 二三二 | 九九 | 一、二八七 | 二、四〇九 | 二、一四五 | 三、四六五 | 五九四 | 三三〇 | 一、五八四 | 七五九 | 七九二 | — | 一三、五九六 |
| 大正十三年度 | 九九 | 一、六五〇 | 七、九二〇 | 一〇、八二四 | 二二、八二四 | 一五、四四四 | 四、二五七 | 一、四五二 | 二、二二一 | 二、一四五 | 八二五 | 六六〇 | 六〇、二九一 |
| 大正十四年度 | — | 二三二 | 五、一四八 | 一五、七四一 | 一六、六九八 | 一一、二六六 | 一三、八九六 | 四、八五一 | 三、七五五 | 三、六九六 | 一、二五四 | 一、八八一 | 六八、一二七 |

開原驛及市中に於ける月末在貨狀況を示せば次の如くである。

月末包米在貨狀況（取引所月報）

| 年次＼月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十二年 | —噸 | —噸 | 三噸 | 一六五噸 | 三九六噸 | —噸 | —噸 | —噸 | 六六噸 | —噸 | —噸 | —噸 |
| 大正十三年 | — | 二三二 | 七〇〇 | 七五 | 七六 | 二九七 | 九九 | 六六 | 九九 | 六六 | 三三 | — |
| 大正十四年 | 三三 | 二、三七六 | 一〇、二六三 | 九、九〇〇 | 四、三八九 | 一一、四八四 | 二、三一〇 | 九九 | 六六 | 三三 | — | 九九 |

取引慣習　當地の包米取引は現物のみであつて火車物取引及馬車物取引の二種がある。兩者共に一支斗（一・五二斗約三四斤）を以て建値の單位とし取引單位にあつては火車物は一車、（四九、五九四斤）馬車物は建値の場合と同樣一支斗である。全部小洋錢建にして公定相場は一斗値段であつてその受渡し條件は大體次の如くである。

火車物取引

一、賣買方法　仲介人に委託す

二、受渡場所　驛賣手、買手院內

三、受渡時期　七日以內

四、支拂時期　同上

五、馬車賃　驛渡賣手負擔、院內渡買手又は賣手負擔　買手負擔

馬車物取引

店員を現物市場に派す

買手院內

即日

現金

第四項　四平街

集散狀況　當市場への出廻品は西安、東豐、伊通、梨樹、雙山の諸縣より來集し全數量一箇年約六萬石餘にしてその出廻割合を地方別に見るに西安、東豐、伊通の各縣方面より全入市高の六〇％梨樹、雙山其他附近諸縣より四〇％入市するものと見ることが出來る。

右の仕向地は大連、安東、營口、奉天等をその主なるものとし開港に至りたるものは船便を以て直隷、山東、日本方面へ移輸出され奉天に至れるものは京奉線に依り天津方面へ輸送せられる。而して從來の例に依れば大體に於

て大連仕向のもの全數の六〇%奉天、營口一五%安東一五%其他各地へ一〇%の割合なりと云ふ事が出來る。

出廻り期節は十月下旬より三月頃まで、ある。當驛發送高を示せば次の如し。

四平街驛包米發送高表（會社年度）

| 大正八年度 | 大正九年度 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 | 大正十四年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 七、〇五二噸 | 一三、〇九三噸 | 一八、四六五噸 | 二九、二五〇噸 | 七、二四〇噸 | 一一、八四六噸 | 二三、八〇四噸 |

四平街包米發送仕向地別數量（會社年度）

| 仕向地＼年次 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 | 大正十四年度 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大連 | 一三、四一三噸 | 二六、九二一噸 | 四、七二一噸 | 四、五六八噸 | 一八、〇六四噸 |
| 營口 | 二、一一五 | 三二二 | 四三 | 二、三一二 | 二、五一六 |
| 安東 | — | 三三 | 六六 | 五九四 | 三四 |
| 其他東 | 二、九三七 | 一、九七四 | 二、四一〇 | 四、三七二 | 三、一八九 |
| 合計 | 一八、四六五 | 二九、二五〇 | 七、二四〇 | 一一、八四六 | 二三、八〇四 |

發送の旺盛なる季節は十二月頃より翌年三四月頃までにして次の如し。

四平街包米發送高月別表（單位噸）

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十二年 | 五、三二五 | 四、六〇〇 | 三、六四四 | 二、一三二 | 一、六六九 | 三四七 | 三五〇 | 一六〇 | 一 | — | 四 | 一六一 | 一八、二九九 |
| 大正十三年 | 五七九 | 六六〇 | 一、一八三 | 一〇四 | 一八〇 | 三八一 | 四七四 | 一六六 | — | 二 | 三三一 | 一、六五三 | 五、六九一 |
| 大正十四年 | 二、一八四 | 一、四〇六 | 四、九八五 | 一、九八四 | 五〇四 | 一、〇五五 | 八一〇 | 五一〇 | 六 | 二 | 二一五 | 一、五〇一 | 一五、一六三 |
| 大正十五年 | 八、四七四 | 七、三二九 | 一、五二二 | 三、三二九 | 一、〇二七 | 一、二二五 | 二、三六七 | 九九五 | 七九七 | 八六六 | 一〇四 | — | 二七、二八六 |

備考　大正十五年十二月分を含まず

取引慣習　普通雜穀の取引と異なる所はない。即ち粮棧が農民より馬車卸にて買入れ纏め置きたるものを時に應して賣買するものにして之が取引には必ず經記の仲介を經る。經記の仲介料は賣買雙方にて半折負擔する。粮棧は一分口錢即ち從價百分の一の『用錢』（手數料）を客人より徴集する。再取引の場合は證券となつて居るが此の場合に於ても手數料を要する。

稅捐は出產稅　正稅從價百分の一

附加稅は正稅の十分の一

## 第五項　公主嶺

集散狀況　當市場に馬車を以て出廻り來る奥地々方は懷德、伊通兩縣を初めとし盤石、海龍の諸縣が主なるものである。來集數量に就ては適確なる數字を擧ぐる事を得ないが當地糧店各戸に就き調査し此を綜合すれば大體次の如くである。

大正十二年度包米出廻縣別

| | | | |
|---|---|---|---|
| 伊通縣 | 一〇、六一〇〆 | 盤石縣 | 三、八五〇〆 |
| 懷德縣 | 一二、四二〇 | 海龍縣 | 二、五六六 |
| 長嶺縣 | 一、四二〇 | 其他 | 四、〇七四 |
| 梨樹縣 | 七二三 | 合計 | 三五、六六三 |

而して右出廻期間節は九月末より翌年三月末までにして冬期結氷期たる十一、十二、一、二月の四箇月間が出廻の最盛期である。

汽車に依る包米の發送噸數は次の如し。

公主嶺驛包米發送噸數表（會社年度）

| 年次＼仕向地 | 大連 | 營口 | 安東 | 其他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正七年度 | 一、一一三噸 | 一七二噸 | 一五〇噸 | 一、八六七噸 | 三、三〇二噸 |
| 大正八年度 | 一、五八八 | 五五〇 | | 三五六 | 四、七三一 |
| 大正九年度 | 四、三七〇 | 二、三七一 | 二、二三七 | 八、五五〇 | 一五、二九一 |
| 大正十年度 | 五、五六三 | 七二九 | | 二、〇一七 | 八、三一一 |
| 大正十一年度 | 七、五〇一 | 五六九 | — | 七一一 | 八、七八一 |
| 大正十二年度 | 八〇三 | — | 六八 | 三六四 | 一、二三六 |
| 大正十三年度 | 三、七六四 | 一、三三三 | — | 一、七六一 | 六、八五八 |
| 大正十四年度 | 五、八七六 | 二、七八八 | — | 一、七四二 | 一〇、四〇六 |

各月別に發送高を示せば次の如し。

公主嶺包米月別發送高（取引所月報）

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十二年 | 八四六噸 | 二、四三二噸 | 三、〇三二噸 | 四二五噸 | 二九七噸 | — 噸 | 一八五噸 | 三三噸 | 三三噸 | — 噸 | — 噸 | — 噸 | 七、二七四噸 |
| 大正十三年 | 二二〇 | 四 | 二六六 | 三三 | 三三 | 二四 | 三七三 | 四四 | — | — | — | 九九 | 一、六八九 |
| 大正十四年 | 一、九二四 | 一、〇〇三 | 二、六六八 | 四三七 | 二九 | 二〇八 | 六七 | 七二 | 一 | — | — | 六九三 | 六、四七六 |
| 大正十五年 | 一、九三三 | 四、八七七 | 二、三三六 | 四、〇八八 | 一、三六八 | 一、二六七 | 一、二二三 | 一、三二〇 | 八二五 | 三三〇 | 六二七 | — | 二五、六九六 |

備考　大正十五年は十二月中を含まず。

取引慣習　受渡場所より驛ホームまでの運賃は賣手持とし代金先渡後院内にて袋込をなす。

建値單位　一支斗（三十六斤、斤量建）（馬車物は一支斗、々量建一、八斗、三八斤）

取引單位　一支斗或一車

取引貨幣　奉天票

諸稅は買手負擔只農民は出產稅として從價百分の一の正稅と正稅の一割の附加稅とを負擔する。

## 第六項　長春

集散狀況　長春市場への出廻り系統は此を馬車に依る輸送、東支線に依る到着及び吉長線に依る到着の三系統とすることが出來る。而して一箇年間の出廻り數量は年に依り甚だしき變化があつて一概に之を論ずる事は出來ないが從來の例に見ればその數量中馬車に依る來集最も多く全數の九割以上を占め東支線寬城子着長春打切り着若しくは吉長線に依る到着は極めて僅少であつたのが大正十四年度には東支南滿連絡數量は激增して從來の狀況に變化を來した狀態である。次に此等諸系統に依る集散狀況を略述する事にする。

馬車輸送　馬車を以て出廻る包米の產地は舒蘭、双陽、扶餘、農安、德惠、長嶺の各縣であるが就中長春への出廻品には農安產のものが最も多い。

馬車出廻りの數量を示せば次の如くである。

馬車出廻數量累年（出廻り年度）

| 大正八年度 | 大正九年度 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 | 大正十四年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一四、七四七噸 | 一八、七三三噸 | 二六、〇二五噸 | 二六、一三〇噸 | 七、三四〇噸 | 一三、〇五八噸 | 一二、二八八噸 |

出廻り季節に就いて見ると市場への走りを見るのは普通九月下旬から十月上旬頃でそれより結氷期に入つて出廻りも漸く增加して十二月より翌年の三月末に至る四箇月間が出廻の最盛期である。馬車出廻りを月別に示すと次の如くである。

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十三年 | 四、三九九 | 一、五六九 | 七〇〇 | 一三六 | 五 | — | — | — | 六〇 | 八三〇 | 二、七四四 | 三、八五二 |
| 大正十四年 | 二、九三五 | 一、九八二 | 三六〇 | 八五 | 七 | 六 | 一 | 五 | 六九 | 四九五 | 一、〇八一 | 二、四三四 |
| 大正十五年 | 三、五七八 | 二、一六一 | 二、四九五 | 一〇 | 一八 | 五 | — | — | 二〇六 | — | — | — |

備考　十五年十月次降は尙ほ不明

東支鐵道に依る到着、東支鐵道に依つて長春に到着する數量も年に依つて變化がある。而し近年漸次その數量增加の傾向にありと云ふ事が出來る。東支線發春長打切り着の數量を示すと次の如し。

| 大正八年度 | 大正九年度 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 | 大正十四年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一一噸 | 九〇一噸 | 三二噸 | 一八噸 | 二九三噸 | 四一八噸 | 三、〇七九噸 |

右到着包米は主として東支南部線各驛發送のものにかゝる。次に東支南滿連絡扱で南行した數量を示すこと次の如くである。

| 年次 ＼ 仕向地 | 大連 | 營口 | 安東 | 其他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正八年度 | 一六噸 | 一噸 | 一噸 | 一噸 | 一七噸 |
| 大正九年度 | 一四九 | — | — | 二一〇 | 三五九 |
| 大正十年度 | 四六〇 | — | — | 六〇 | 五二〇 |
| 大正十一年度 | 四四二 | — | — | 三三 | 四七五 |
| 大正十二年度 | — | — | — | — | — |
| 大正十三年度 | 八四五 | — | 九九 | 六六 | 一、〇一〇 |
| 大正十四年度 | 四三、五二六 | 二、七〇六 | 八五八 | 三、〇四一 | 五〇、一三一 |

以上の如く東支線發のものにして南滿へ南下した數量は從來僅少にして殆ど言ふに足らなかつたのである。即ち大正三年以後に就いて此を見るも大正六年に於ける三萬五千噸餘を最高とし大正十二年の如きは北滿一帶は一般に凶作の爲めむしろ逆行の狀態であつたものが大正十四年度に於ては一躍五十萬噸を越ゆるの盛況を呈したのは北滿穀物の豐作と包米の需要增加に起因すると謂はねばならぬ。右連絡南下する包米の發驛は主として南部線に屬し双城堡、窰門等よりするものが多い。

吉長南滿連絡扱にて南下せるもの次の如し。

| 年次 ＼ 仕向地 | 大連 | 營口 | 安東 | 其他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正八年度 | 二七九 | — | — | 二三 | 三〇二 |
| 大正九年度 | 八二八 | — | — | 八一〇 | 一、六三八 |
| 大正十年度 | 二、一一〇 | 八四〇 | — | 六一七 | 三、五六七 |
| 大正十一年度 | 三、六七九 | 九〇 | — | — | 三、七六九 |
| 大正十二年度 | 一七 | — | — | — | 一七 |
| 大正十三年度 | 一三二 | — | 三三 | — | 一六五 |
| 大正十四年度 | 四、六二〇 | 一三二 | — | 三三 | 四、七八五 |

右發驛は吉林、孤店子、九站を主なるものとする。而して從來の例に依ると連絡扱の多い時期は一、二、三、四の四箇月間である。

斯くて長春驛扱の南行包米の總數を示すこと次の如くである。

長春驛取扱包米南行數量累年

| 年次＼種別 | 自驛發 | 東支連絡扱 | 吉長連絡扱 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 大正八年度 | 一一、三七五噸 | 一七噸 | 三〇二噸 | 一一、六九四噸 |
| 大正九年度 | 一五、四七五 | 三五九 | 一、六三八 | 一七、四七二 |
| 大正十年度 | 二一、二二九 | 五二〇 | 三、五六七 | 二五、四〇六 |
| 大正十一年度 | 三〇、二四一 | 四七五 | 三、七六九 | 三四、四八五 |
| 大正十二年度 | 四、五二三 | ! | 一七 | 四、五五〇 |
| 大正十三年度 | 八、六〇一 | 一、〇一〇 | 一六五 | 九、七七六 |
| 大正十四年度 | 一五、四二六 | 五〇、一三一 | 四、七八五 | 七〇、三四二 |

長春驛より發送せられたるもの或は他線との連絡扱で南行するもの、大部分は大連仕向のものである事は前各表に依つて此を知る事が出來る。大正十二年度に於ては北滿一帶不作のため食料或は釀造原料に不足を來し包米も却つて北行するの現象を呈したけれども此は一寸の變態的な事情に起因するに過ぎないので平年作に於ては尙ほ相當の南下餘力を期待する事が出來る。長春市場院内在貨狀態は一般特産物と同じく結氷後馬車出廻りの盛なるにつれ漸次增加し一月以降三月に至る三箇月間は最も在貨豐富にして馬車出廻りの減少と共に品薄を告げて居る院内に於ける月末在貨の狀況を示せば次の如くである。

院内月末在貨表

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十一年 | 九、六七〇 | 一一、九六〇 | 一一、九一八 | 五、九三六 | 二、一一〇 | 三、一三五 | 三、〇三八 | 二、〇四九 | 一、四〇三 | 六三七 | 一、七一一 | 三、六七一 |
| 大正十二年 | 六、三八五 | 六、五四七 | 五、一〇八 | 三、六六六 | 二、八八七 | 二、一九三 | 一、一四九 | 二、九一〇 | 一、一三六 | 九八八 | 三三四 | 三、八三三 |
| 大正十三年 | 六、八九六 | 七、〇三八 | 五、三一六 | 四、九七七 | 四、六〇二 | 四、一九六 | 三、〇一二 | 一、一〇〇 | 三七三 | 一、一〇七 | 一、四九二 | 五、九二二 |
| 大正十四年 | 四、七〇八 | 四、五五九 | 三、〇四五 | 二、六六九 | 三、四二一 | 一、五一五 | 八六三 | 三八一 | 三〇五 | 三八三 | 一、九八〇 | 九、一八九 |
| 大正十五年 | 一〇、六二二 | 一二、二九三 | 一一、三六五 | 一〇、七〇六 | 九、一〇六 | 七、九一八 | 六、四一六 | 六、六二〇 | 四、二二八 | — | — | — |

取引慣習　糧棧は例年出廻期の間每日相場の高低に依り手加減するも日々馬車卸しをなし農夫の委託に依り直ちに他の買付客に賣付くるか又一時立替拂をなし他日相場出合の際賣付けて代金を淸算するか若しくは自家に於て田舍より來集せる馬車物を買入れるか或は店員を奥地生産市場に派して買付けしめ之を國積又は麻袋入のまゝ保管し端界期までに賣放すのである。

馬車卸取引は見本又は現物に依り建値は一支斗（三五斤）に對する官吊建にして買付客の院内渡を普通とする。

取引は他の穀類と等しく取引所に於ける取引及び取引所外に於ける取引とがあるが何れにしても取引方法は見本若しくは現物に依り相對賣買の方法に依つて行なはれる。斯くて双方値段が折合へば買方院内の現物を見たる上契

約し契約と同時に若しくは翌日代金を支拂ふ事になつて居る。粮棧は之に對して賣渡證を買方に交付する。取引單位は普通一車にして建値は一支石（三五〇斤）に對する鈔票建である。

受渡場所は買方院内若しくは驛渡にして買方は麻袋代の外糸及口縫賃として一車に付き金二圓位を賣方に支拂ふのである。

包米の容器としては麻袋を使用する。滿洲内の取引若しくは支那人間の取引に於ては契約なき限り古麻袋を使用するも大連重要物産組合にて取極められたる奥地大連間の取引條件としては特に指定せざる限り總べて新麻袋詰とし次の如く詰斤量を一定し大正十三年八月一日より實施して居る。

鐵麻袋　正味一袋一四〇斤、一車三五一袋積

## 第七項　鄭家屯

出廻狀況　當地への馬車出廻高は年の豐凶其他の事情に依り增減あるも大正十三年度に就いて見るに

| | | |
|---|---|---|
| 出廻高 | 二一、〇〇〇支石 | 一支石は邦石一石九斗餘に當る |
| 内當地消費高 | 二、〇〇〇 | |
| 差引移出餘力 | 一九、〇〇〇 | |

にして來集縣名並にその數量を示せば大約次の如くである。

| | | |
|---|---|---|
| 雙山縣 | 鄭家屯より八十支里遼河東 | 九、〇〇〇支石 |
| 道遼源縣 | 鄭家屯より大平川に到る、洮鄭沿線の開放耕地 | 九、〇〇〇 |
| 荒 | 鄭家屯周圍耕地 | 三、〇〇〇 |

包米は大豆、高粱、粟等に次いで市場に上る。蓋し包米は他の穀類に比して氣溫に依る影響割合に少なきため收穫及び脱穀を後廻しとするがためである。而して出廻りは毎年十月中旬より翌年三、四月迄の間なるも最も盛なるは十二、一、二月の三箇月間である。

仕向地は大連、營口方面なるも此等を經由して山東方面に至る。

取引慣習　包米の馬車卸取引を見るに農夫が馬車にて市場に搬出したるものは糧棧又は糧棧店に馬車卸せられる。糧棧店に輓入れられたるものは糧店の店員又は仲買人等の手に依り取引せられる。院内取引の桝計りには賣買共に糧棧の桝を用ひ桝計りも粮店の者又は專業のものをして此に當らしむる。斗錢は粮棧持ちである。

斯くて粮棧に入れる穀物は再び經記等の手を經て他の粮店又は仕向地商人との取引に依り移出せられる。經記の手を經れば手數料を必要とする。

粮店より買付くる穀物は殆ど院内渡で穀物の驛出及び麻袋、口縫錢等は買主負擔とす。包米は他の穀類の如く青田取引が行なはれる事がない。

稅金を見るに

賣買主半折負擔

正捐（財政廳收納）賣價の百分の一、即ち百元に就き一元

附加税　賣價の千分の一、即ち百元に就き一角

賣主負擔

公捐（縣公署收納）賣價の千分の六、六即ち百元に就き六角六分

尙ほ外に炕錢（粮店の馬車卸費其他の雜費とも稱す可きもの）と稱して穀物一石に對して千分の三を糧店に支拂ふ

右の税金は粮店に於て取り立て税捐局に申告納税する。

## 第八項　洮南

集散狀況　洮南城内に來集するものは洮南縣を初めとし洮安、突泉、鎭東の諸縣より來るものにしてその來集高は年の豐凶に依り變化はあるが約二萬邦石内外なる可しと推算せらるゝ。馬車出廻の時期は毎年十一月より翌年四月に至る。而して十二月一月の兩月は出廻の最盛期と見ることが出來る。

次に洮南驛に於ける發送高とその仕向先を見るに次の如くである。

（大正十三年中）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大連 | 二八車 | 蓋平 | 一車 |
| 四平街 | 一〇車 | 本溪 | 一車 |
| 撫順 | 二車 | 鳳城 | 一車 |
| 昌圖 | 一車 | 其他 | 五車 |
| 合計 | 五〇車 | | |

取引慣習　取引慣習に就いて見るに馬車卸を買付くる場合には田舍より農夫が馬車に積載して入城し來るもの或は店員を各地に派し買付契約又は口約したるものを自己の院内に於て取引する。此の際に於ける計量は買手に於て行ふため一斗に付き五、六合洮南桝の出桝あるを普通とする。糧棧より買付くる場合は穀物仲介人を通して行ふものにして馬車卸買付の如く少量にあらず普通三十石以上である。此の場合に於ける計量は買手立合の上賣斗に於て此を行ふ。

經記の手を經て賣買契約成立すれば賣手は穀物取引條子を買手は代金支拂條子を相互に交換し（條子には代金に應じて印花を貼附す）而して三日以内に買手は賣手より貨物を引き取るが普通である。此の際代金の支拂も亦此をなす。現在市場には現物賣買のみ行なはれる。

麻袋其他の容器は買手方より賣手方の貨物保管地點まで持込置き買手方立合の上賣手方此が計量をなす。此に要したる馬車賃其他の費用は全部買手方の負擔とす。

粮棧に於ける賣買手數料は現在の處一定せざるも取引高百元に就き二元見當である。粮棧が經紀の手を經て市中粮棧其他より買付けたる場合は經記の口錢を支拂はねばならないが此は又賣手に於ても同樣であるから經記は賣手買手の雙方より同額の口錢を收得する事になる。

麻袋（鐵筋麻袋）の容量は洮南桝三斗入にして一三六・五斤とする。

建値は一斗（洮南桝）、小洋票建である。

一貨車に對する運送手數料を要し又驛構内に囤積をなす場合は一貨車の積載量に對し別に雨覆アンペラ貸與料を要す。

## 第九項　吉林

集散狀況　包米は大豆、高粱等に比してその出廻時季稍遲れ舊正月を控ふる十二、一、二月の三箇月間出廻旺盛にして四月頃までを大體に於て出廻時季と稱する事が出來る。

吉林附近に於て盤石縣は包米の栽培盛んなるも其他の諸縣にありては多く山間の僻地に農民の自家食料として植へ付けらるゝものあるに過きず商品として市場に出廻るの餘地はない。而して吉林城に集まるものは僅かに吉林縣の一部（東南部）額穆縣の大半及び舒蘭、樺甸、敦化、濛江各縣の一部分に過ぎない。

從前は夏期松花江の水運に依り來集するものありしも現今は水運に依るものは甚だ稀である。包米は當省城に於て消費する外從前（大正十二年迄）は三、四萬石の移出ありしも大正十三年は出廻り著しく減退し返つて他地方より高粱等と共に補給を受くる狀態でその出廻數量の如きも年に依り著しき相違あるも現今にては大約年四、五萬石と推定せらるゝ。

取引慣習　當地に於ては專ら現物取引行はれ先物取引の如きは極めて稀に一部の商人に依りて行なはるゝに過ぎない。多くは生產者たる農民が橇又は馬車にて地方より直接當地德勝門糧市に搬入するや各仲買人は買賣兩者間に周旋して取引が行なはるものであるが同市場には稅捐局員出張し仲買人の賣買契約に關する報告を監視記帳し稅金を徵收する。然るに近來は前記糧市に持ち込むもの漸次減少し荷主たる農民は市內馬車宿の院內に持ち込み仲買商と商談するの傾向を呈せるは納稅の追求嚴なるに因るものゝ如くである。その稅金は左の如し。

| | | |
|---|---|---|
| 銷場稅 | 從價百分の二 | 買主（糧店）負擔 |
| 出產稅 | 從價百分の二 | 賣主（農家）負擔 |
| 斗稅 | 每斗大洋の千分の六 | |
| 地方稅 | 縣稅にして從價千分の六 | |
| 牙稅 | 交易價格の百分の二 | |

備考　何れも吉大洋に依つて徵稅するものである。

## 第十項　齊々哈爾

當市場へ來集する包米の來集縣名とその大體の數量とを見ると次の如くである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 克山縣 | 二、二〇〇石 | 景星縣 | 一、三〇〇石 |
| 林甸縣 | 二、五〇〇 | 河縣 | 二、二〇〇 |
| 龍江縣 | 二、四〇〇 | 肇東縣 | 一、四〇〇 |

合　計　一二、〇〇〇

出廻時期は毎年十一月より翌年五月上旬迄にしてその中最も出廻りの旺盛なるは十二月より一月までの三箇月間である。

仕向地とその數量とを示せば大體次の如くである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 昂々溪 | 四五〇石 | 海拉爾 | 二、五〇〇石 |
| 札蘭屯 | 四〇〇 | 滿洲里 | 二、七〇〇 |
| 博克圖 | 五〇〇 | 計 | 五、五五〇 |

取引慣習　各粮棧は出廻期に店員を產地に派遣しその土地の仲買人を集め包米若干石購入の旨を述べ仲買人が農家に至り持ち來れる見本を一覽後價格、現物受渡期、受渡場所等を商議し商談纏まれば買手は若干の手付金を渡す。但し賣手も亦信用ある保證人を立つるの必要がある。尙ほ所定の期日までに賣手が所定の場所に貨物の輸送完了の上買手より殘金の全部を支拂ふことゝなる。但し輸送費用は賣買契約の際何れか負擔す可きかを定むる。又各農家自から自家生產に係る包米を馬車に積み當市場に搬出するものがある。此に對しては內市各粮棧は店員を各要道に派し各自粮棧の特徵、買付に對する便益等を盛に宣傳し自家院內に持ち込ましむる。

相場の單位は石或は斗にして外國人との取引に付布度（三十三支斤に當る）を用ふる。

取引貨幣は官帖を用ふ。

稅捐は

1. 國稅從價　一步一厘
2. 出境稅從價　二步二厘
3. 地價稅從價　一步八厘とす。

## 第十一項　安東

集散狀況　當地への農產物の出廻經路は

一、馬車に依る出廻り
二、水運に依る到着
三、鐵道に依る到着

の三系統に大別する事が出來る。

馬車出廻は春秋冬を通して行なはれ出廻高約三千石と推定せられ主として寬甸縣及び鳳城縣より來る。

河物の出廻は春秋を主とし來集高約三千石にして鴨綠江沿岸地方即ち大東溝、大孤山、莊河方面より來るものにして夏期に於て當地への出廻りなきは直接消費地に供給せらるゝが爲である。

汽車物は春より夏の間最も多くその到著數量を擧ぐれば次表の如くである。

安東驛包米到着噸數累年

| 大正七年度 | 大正八年度 | 大正九年度 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 | 大正十四年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 七、七 | 一〇、七五九 | 一、四六四 | 八八 | 一〇一 | 四五三 | 一、一四八 | 一、一〇一 |

安東驛へ奥地より到着せる包米の發驛を見るに次の如し。

安東驛着包米發驛別累年（會社年度）

| 年次 ／ 發驛 | 鐵嶺 | 開原 | 四平街 | 長春 | 東支線 | 其他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十年度 | 噸 | 噸 | 噸 | 噸 | 噸 | 噸 | 噸 |
| 大正十一年度 | — | — | 一三 | 一〇 | — | 四八 | 一〇一 |
| 大正十二年度 | — | 六六 | 六六 | — | — | 三六 | 四三 |
| 大正十三年度 | 一 | 一七 | 五四 | 二二 | 九九 | 一六九 | 一、二四八 |
| 大正十四年度 | 三 | — | 三四 | 一 | 八五八 | 一七五 | 一、一〇一 |

此が輸移出に就いて見るにその數量も年に依つて一樣でなく仕向地主として支那諸港向であつて日本内地仕向のものは大正十一年を除いては皆無と云ふも可なる可く近年に到つて朝鮮へ輸出さるゝ數量が漸次增加して居るけれども尙ほ云ふに足らない。

安東港輸移出包米數量累年（單位百斤　北支那貿易年報）

| 大正八年 | 大正九年 | 大正十年 | 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 | 大正十四年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 九三、三〇 | 三〇、〇〇一 | 三四、三四 | 一二九、八五〇 | 七四、四三五 | 二三、〇〇一 | 一六七、一三八 |

安東港包米輸移出仕向國數量別表（單位百斤）

| 仕向地 ／ 年次 | 大正十年 | 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 | 大正十四年 |
|---|---|---|---|---|---|
| 日本 | — | 一二、〇一〇 | — | — | — |
| 朝鮮 | 一〇六 | 八六 | 四、三一七 | 七、九九七 | 一四、四八六 |
| 計 | 一〇六 | 一二、〇九六 | 四、三一七 | 七、九九七 | 一四、四八七 |
| 上海 | — | — | — | — | 三、三五五 |
| 芝罘 | — | — | — | 四四五 | 一三、九三〇 |
| 天津 | — | — | — | 二二五 | 四一、七九八 |
| 龍口 | — | — | — | 一、三八七 | 六、五六一 |
| 琿春 | — | — | — | — | 二〇、〇三五 |
| 威海衛 | — | — | — | — | 八 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 近海 | 一 | 一 | 一 | 二三、七四七 | 六六、九六四 |
| 支滿諸港 | 一〇二、一〇四 | 一八七、七五四 | 七〇、一〇八 | 一 | 一 |
| 計 | 一〇二、一〇四 | 一八七、七五四 | 七〇、一〇八 | 二二、六〇四 | 一五二、六五二 |
| 合計 | 一〇二、一一〇 | 一九九、八五〇 | 七四、四二五 | 三三、六〇一 | 一六七、一三八 |

取引慣習　普通現金取引なるも時に四十日或は五十日の延取引の行はるゝ事がある。

支那側課税次の如し

一、海關税　毎百斤　鎭平銀四匁

二、税捐局税捐　毎百斤　奉天大洋票一元六五

## 第十二項　營口

集散狀況　營口市場への包米出廻りの徑路は其他の農産物の出廻り徑路と同しく此を次の五種を分つ事が出來る。

一、遼河の水運に依る到着

二、南滿鐵道に依る到着

三、京奉線に依る到着

四、馬車に依る到着

五、港外より來るもの

以上各系統に就いて見るに遼河の水運に依る到着は往年に於ては營口へ來集する雜穀の大部分を占めて居たのであるが南滿四洮鐵道の敷設に依つて此等に吸收せられ水運に依る出廻りも漸次減少した。而しながら尙ほ運賃關係其他の事情に依つて此に依つて當市場へ出廻るものも尙ほ相當の數額に上るけれども此に就いては正確な統計がない此が推定額を示せば次の如くである。

遼河に依る出廻り高（單位米噸）

| 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 |
|---|---|---|
| 六三五米噸 | 九一〇 | 八四六 |

遼河に依る出廻りは結氷の關係上十二月より翌年三月中旬までは絶無である。來集包米の産地は牛莊、法庫門、三江口、新民屯、同江口等より來るもの最も多く何れも品質に於ては中等品と謂ふ事が出來る。

遼河の水運に依らざる近縣のものは全部馬車に依つて來集し往年に於てはその數量も相當大なるものであつたが此も漸次鐵道に吸收せられて急に減少した。正確な統計を得難いけれども穀棧等に就き最も信ず可き最近三箇年の數量を示せば次の如くである。

馬車出廻り數量（單位米噸）

| 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 |
|---|---|---|
| 一、一八五 米噸 | 一、二四九 | 六三五 |

以上馬車出廻りのものは殆ど營口、海城、蓋平の諸縣より來るものにして品質も亦良好である。

戎克貿易の盛なりし頃は戎克に依り到來するもの多量に達したりしも現今に於てはその數僅少にして言ふに足らない。

京奉沿線發のものにして營口に出廻るものは石山站大凌河錦州發送のもの多く就中石山站發のものが最も多い。

南滿鐵道に依る包米の到着を見るにその數量も年に依つし變化があるけれども近年に於ては大體增加の傾向にあると云ふ事が出來る試みに最近數年間に於けるその到着數量を示せば次表の如くである。

營口驛包米到着噸數累年表（單位噸　生産年度）

| 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 | 大正十四年度 |
|---|---|---|---|---|
| 五、六九九 | 三、七二七 | 四、〇七〇 | 二七、〇五六 | 五三、〇五一 |

此が發驛を見るにその發驛は遼陽を除くの外主として奉天以北にして開原、四平街、公主嶺、范家屯諸驛の發送にかゝる。四洮連絡吉長連絡及び東支連絡扱にて南行する數も漸次增加の傾向にある。

營口到着包米發驛別（單位噸　生産年度）

| 年次＼發驛 | 遼陽 | 開原 | 四平街 | 四洮線 | 郭家店 | 公主嶺 | 長春 | 吉長線 | 東支線 | 其他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十年度 | 三三五 | 一、三九五 | 三〇三 | 三〇一 | 三六〇 | 四六五 | 六九三 | 九〇 | — | 一、八六八 | 五、六九九 |
| 大正十一年度 | 二 | 一、〇五八 | 二四四 | 三四九 | 四八 | 一二三 | 三六三 | — | — | 一、五二九 | 三、七二七 |
| 大正十二年度 | 四四 | 三六九 | 二九八 | 三七 | — | — | — | — | — | 三、三三二 | 四、〇七〇 |
| 大正十三年年 | 四一四 | 七、七〇〇 | 四、一九八 | 二、七五二 | 一、二四四 | 一、七一二 | 二、一三二 | 九 | 二、二四四 | 三、六六二 | 二七、〇五六 |
| 大正十四年度 | 一、八九二 | 一八、八七四 | 三、五〇三 | 四、八五九 | 三、四六五 | 六、一五〇 | 一、七二一 | 四二九 | 一、四五二 | 一〇、六二八 | 五三、〇五一 |

品質に就いて此を見るに一般に滿洲南部產のもの良好にして北上するに從つて品質も稍劣る樣である。

次に營口港よりする包米の輸移出狀況を見るに船舶輸移出の外戎克を以て輸出せられ輸移出の盛んならざりし頃は重要なる位置を占めて居たが移出の急增するに從つてその重要の度も漸次薄らくに至つた。

仕向地は主として支那諸港であり特に近年に於ては天津仕向のもの多く此は天津方面に於ける需要の多きとそのの地理的關係とに原因する。包米の輸出高を仕向港別に示せば次の如くである。

營口港包米輸移出仕向地別數量表（單位百斤）

| 仕向地＼年次 | 大正九年 | 大正十年 | 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 | 大正十四年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 日本 | — | 一、七九八 | 五、一四五 | — | 一九、一三四 | 三、四三一 |
| 天津 | 四、七六六 | 二五九、七五九 | 一〇四、六四九 | 八八、九八六 | 二八、〇八一 | 四五五、二三四 |
| 上海 | — | — | 三三、五七六 | 四二、二四八 | 二三、八九八 | — |
| 龍口 | 一五、三九二 | 九、三五五 | 一九、一九〇 | 一三、五〇六 | 二三、一九七 | 一四、四八五 |
| 登州 | 三三、八六二 | 一七、五三六 | 二、三三六 | 二三、五三〇 | 二九、三七 | 三四、五四一 |
| 芝罘 | 五 | 三 | 一、一三五 | 一、一二六 | 八 | 三八 |
| 其他 | — | — | — | 一八三 | 一三 | 六、六〇九 |
| 戒克移出 | 四六、六二〇 | 三、四三〇 | 四七、七九六 | 三二、〇〇八 | 五〇、二四八 | 五五、六七九 |
| 合計 | 八九、六四五 | 三〇一、八九九 | 二三二、七九七 | 二〇一、七五七 | 一七三、九〇六 | 五六八、〇一八 |

取引慣習　包米の取引には直隷山東方面よりの商人渡來し奥地又は當地にて買付くるもの、農家が馬車にて搬出せるものを買付くるもの及奥地客が汽車又は遼河にて運送し來り賣り出すものとがある。馬車にて來るものは當地大車店に宿泊して賣り出すが此の場合は賣方は大車一臺分に就き房費を徴せられ食事は小館に於て食し又大車店に於て賣買出來たる時は手數料を徴せらるゝ。汽車又は遼河に依り來るものは賣方は當地經記房子に宿泊し經記房子は客に代りて賣り出す。此の場合經記房子は客の宿泊料を徴せずして仲介料と食費を徴する。當地に於ける包米の取引は總べて現物取引にして先物取引なく相場は一斗（支那桝）、奉天票建にして取引單位は普通一支石建（三二〇斤、一、八二石）である。但し日本人間に於ける取引單位は一車（三三噸）にして相場は百斤金票建とする。

税金は出産税として從價百分の一五を納め輸出税は百斤に就き一海關兩附加税は輸出税の百分の二である。

## 第十三項　大連

大連市場へ集まる包米の大部分は汽車便を以て奥地各市場より來集するものにして此の外に少量沿岸各地方より戎克を以て陸上げせらるゝものもあるがその數量は言ふに足らない。

大連埠頭へ汽車を以て到着する包米の發驛は遼陽を除くの外奉天以北發送のもの多く特に開原發のものは非常な數字を示して居る、亦東支連絡扱にて南行し大連へ仕向けらるゝ包米の數額も漸次增加の傾向にあると謂ふ事が出來る。

又此が到着の期節は産地よりの特産の出廻期に稍遲れて十二月頃より漸次增加し一、二、三、四の五箇月間が最も多い樣である。

大連埠頭到着包米發驛別噸數表　（單位米噸）

| 發驛＼年次 | 自大正九年十月 至大正十年九月 | 自大正十年十月 至大正十一年九月 | 自大正十一年十月 至大正十二年九月 | 自大正十二年十月 至大正十三年九月 | 自大正十三年十月 至大正十四年九月 |
|---|---|---|---|---|---|
| 東支連絡 | 四四五・六 | 七六四・三 | 五五五・七 | — | 二、七五一・二 |

| 海城 | 遼陽 | 李寨 | 撫順 | 奉天 | 其他奉天以北 | 新城子 | 新民屯 | 鐵嶺 | 閉原 | 昌圖 | 雙廟子 | 四平街 | 郭家店 | 公主嶺 | 范家屯 | 長春 | 長春 | 吉林 | 連絡 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六〇一・七 | 六〇〇・〇 | 三四三・〇 | 九四四・四 | 一一七三〇・八 | 二一一六六・九 | 一 | 九九・五 | 四〇三・八 | 九六・二 | 二七二〇五・二 | 六五・四 | 五一三七〇・四 | 四〇五・〇 | 二一八六六・八 | 九七二・二 | 六〇三〇・五 | 一 | 三一三三・六 | 三一九六・五 |
| 七一・八 | 七三・〇 | 七二・八 | 三一五三〇・〇 | 三一六六・九 | 七一九三・六 | 一一七一〇・〇 | 二一七六六・六 | 一一六〇・〇 | 一一六・〇 | 六六四・四 | 一五一〇八・七 | 三一三四・三 | 六六六・三 | 一九八三・五 | 五一〇六・九 | 一八八三・五 | 一 | 一一四四・五 | 一一四〇・三 |
| 七七九・四 | 七一・八 | 三一三六・三 | 三一四八・四 | 四一五三・一 | 一四一七四・八 | 三一三七・二 | 三一三五七・二 | 八一二・一 | 一〇三・四 | 六六一四四・九 | 四一四九三・二 | 六一九〇・五 | 三一三六六・〇 | 三一九六六・三 | 一一四四・七 | 三一六六・八 | 一一六六・八 | 一一四七・〇 | 三一〇八七・六 |
| 七一四六・八 | 〇・八 | 三四九・二 | 三一四六・三 | 三一四〇・〇 | 三一四四・〇 | 二一四四・二 | 二一四四二・二 | 四一七・四 | 一六九・四 | 一〇三・四 | 七一三九・六 | 六五・八 | 一一四四・五 | 四一六・七 | 四一六六・六 | 四一七・七 | 一 | 〇・七 | 四一〇・一 |
| 五一七六・三 | 一七七・七 | 一四六・五 | 四一四〇・六 | 九一九三・六 | 一四一七四・六 | 一一七一〇・〇 | 二一七六六・六 | 一一六〇・〇 | 一一六・〇 | 六六一四四・九 | 七一三九・六 | 六五・八 | 一一四四・五 | 一一六・七 | 四一六六・六 | 四一七・七 | 一 | 〇・七 | 一七六・五 |

大連埠頭到着包米月別噸數表（米噸）

| 目 ／ 年次 | 自大正九年十月至大正十年九月 | 自大正十年十月至大正十一年九月 | 自大正十一年十月至大正十二年九月 | 自大正十二年十月至大正十三年九月 | 自大正十三年十月至大正十四年九月 | 自大正十四年十月至大正十五年九月 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 十月 | 三六・二 | 五四五・一 | 三一七五六・八 | 九九・三 | 一〇一七四四・三 | 三一六三・七 |
| 十一月 | 四九二・〇 | 四一四九・三 | 一四一四一五・五 | 三一二六〇・九 | 三一五七・二 | 八一〇九二・九 |
| 十二月 | 三一六六・八 | 二一一七六・一 | 四四一八四九・九 | 五一四七六・五 | 一四一四七・七 | 三一四五六・一 |
| 一月 | 五一一四四・六 | 三一八七五・七 | 二七一六一・二 | 五一六一五・二 | 八一六五・六 | 四一七六九・五 |
| 二月 | 一〇一九三・七 | 三四一七七・三 | 三一一四四・九 | 四一一七五・六 | 二一八六・七 | 四五一四九四・五 |
| 三月 | 三〇一四四・〇 | 三一四四・八 | 二六一四三・八 | 七一四五六・七 | 一〇一五三・七 | 三一四五一・二 |
| 四月 | 二一六三・五 | 五六一六九・六 | 一〇一六三・九 | 二一五一七・二 | 一四一七六・二 | 九一四七・八 |







| 合計 | 安奉線 | 營口 | 南 | 其他奉天以北 | 瓦房店 | 普蘭店 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 五〇一六一・四 | 九四・四 | 一 | 三七四・六 | 四七〇・九 | 二四八・四 | |
| 一四四一四六二・三 | 一四・七 | 三〇・〇 | 一八六三・七 | 一五三・四 | 四五三・五 | |
| 一二六一四三・七 | 五九・五 | 一六・〇 | 二一四二・六 | 二一六七・八 | 八四六・二 | |
| 三四八七二・五 | 五四・四 | | 四一六六・五 | 一五〇・四 | 一四三・五 | |
| 一〇三六一二・五 | 四四〇・六 | 六五・四 | 七一五九・四 | 三一五四・五 | 一九三・九 | |

| 月 | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 五月 | 二、六〇四・一 | 一〇、四六六・八 | 九、二三一・一 | 五、六九一・八 | 一三、九六五・〇 | | | | | | |
| 六月 | 四、二九五・四 | 一、六四八・九 | 三、九三六・三 | 八、二五二・五 | 四、四三七・五 | | | | | | |
| 七月 | 六三五・一 | 三、七一三・七 | 二、二〇二・七 | 三、六五七・七 | 二、七三四・四 | | | | | | |
| 八月 | 一、八二三・四 | 二、三八三・五 | 一、三六三・一 | 二、三七四・一 | 一、三六三・一 | | | | | | |
| 九月 | 三九・五 | 四、六七四・三 | 八〇四・五 | 一〇三二・一 | 四、三二〇・〇 | | | | | | |
| 合計 | 五、九六一・四 | 一四四、四六三・三 | 一六、〇四二・七 | 三四、八七二・五 | 二三、〇九〇・三 | | | | | | |

次に大連埠頭倉庫に於ける各月末の在貨狀況を見るこそその在貨は包米の到着時期たる十二月頃より漸次增加し一月二月　三月末に在貨最も多く以後輸移出の漸く增加するに從つて在貨も漸減の狀況を呈する。次に各月末に於ける在貨噸數を示す事とする。

大連埠頭包米月末在貨狀況

| 年次 / 月次 | 大正九年度 | 大正十年度 | 大正十一年度 | 大正十二年度 | 大正十三年度 | 大正十四年度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 十月末 | 一四八・一噸 | 五五一・五噸 | 二、二八七・九噸 | 四九三・九噸 | 五、七五九・六噸 | 一、七五二・五噸 |
| 十一月末 | 三四三・三 | 一、九二八・二 | 七、五九三・八 | 一、〇六七・三 | 二、三二二・九 | 四、一六八・九 |
| 十二月末 | 一、四八九・八 | 五、一五一・三 | 二四、二〇八・九 | 三、二六六・六 | 七、三六二・一 | 九、四四三・四 |
| 一月末 | 四、五七三・〇 | 二〇、四七一・七 | 一九、〇二八・五 | 二、八八六・一 | 九、二三〇・九 | 二一、一四六・七 |
| 二月末 | 二三、三九二・二 | 一九、八〇九・七 | 二八、五八六・五 | 三、〇五五・九 | 一〇、四七九・五 | 三一、〇五〇・七 |
| 三月末 | 二二、二八四・二 | 一九、六二〇・六 | 一八、八三七・五 | 二、三七九・九 | 六、二七五・二 | 一五、〇〇一・五 |
| 四月末 | 一、九九六・八 | 二〇、〇〇九・一 | 六、六九二・二 | 九二四・五 | 四、四六〇・九 | 二八、一九九・六 |
| 五月末 | 一、二〇四・〇 | 五、八二七・二 | 二、五二二・九 | 一、〇五二・〇 | 二、六二五・五 | 一八、一五七・三 |
| 六月末 | 三、〇〇三・九 | 三、四四七・七 | 一、六二二・四 | 七二〇・九 | 四、七九〇・九 | 一六、一五七・三 |
| 七月末 | 六八四・〇 | 四、七五四・〇 | 一、〇九・四 | 五二九・〇 | 四、二八九・八 | 一三、〇九三・二 |
| 八月末 | 一、〇三二・五 | 二、八二五・九 | 一、五三三・〇 | 二二三・八 | 一、一四八・八 | 六、六八二・五 |
| 九月末 | 三八・七 | 一、八二四・四 | 三六一・一 | 五八九・八 | 四一四・七 | 四、一〇〇・四 |

大連港より輸移出さるゝ包米の數量は奥地の豐凶輸移出先に於ける需要の强弱等に依つてその輸移出も常に甚だしき變化の跡を示して居るが大體に就いて此を見れば增加の傾向を示して居るこゝ云ふ事が出來よう。

輸移出包米の仕向先を見るに此も亦需要各地に於ける需要の强度に支配せらるゝのであるから年に依つて變化のあるは勿論であるが支那諸港向のものは常に多數を示して居る。次に日本仕向のものが多數を占めて居るのであるが大正十三年度產包米は米國諸港へ一萬四千噸以上仕向けらるゝし有樣であつた。試みに滿洲重要物產統計年鑑に依つて包米の輸移出仕向港を詳細に揭ぐれば次の如くである。

尙ほ輸移出季節は十二月頃より五月に至る六箇月間最も旺盛である。

## 大連港包米輸移出仕向港別表

| 別＼港＼年＼次 | 日本 | | | | | | | | | | 日本 | | | | | | | | | | 支那 | | | | | | | | | | 米國 | | | | | | | | | | 其他 | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 境 | 清 | 四 | 小 | 宇 | 門 | 長 | 函 | 名 | 大 | 武 | 三 | 横 | 神 | 戸 | 市 | 樽 | 品 | 司 | 崎 | 館 | 屋 | 厩 | 豊 | 角 | 浦 | 戸 | 葉 | 鄭 | 香 | 港 | 虎 | 咀 | 河 | 衛 | 口 | 州 | 日 | 宗 | 登 | 欒 | 威 | 潮 | 石 | 芝 | 龍 | 海 | 州 | 島 | 津 | 天 | 上 | 海 | 米 | 歐 | 國 | 洲 | 其 | 他 |
| 自大正九年十月至大正十年九月 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 自大正十年十月至大正十一年九月 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 自大正十一年十月至大正十二年九月 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 自大正十二年十月至大正十三年九月 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 自大正十三年十月至大正十四年九月 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

包米輸移出月別表

| 年次 / 月別 | 自大正十年十月 至大正十一年九月 | 自大正十一年十月 至大正十二年九月 | 自大正十二年十月 至大正十三年九月 | 自大正十三年十月 至大正十四年九月 | 自大正十四年十月 至大正十五年九月 |
|---|---|---|---|---|---|
| 劉家旺 | — | 二九・二 | — | 〇・七 | 〇・四 |
| 其他 | — | — | — | — | 一六八・九 |
| 朝鮮 | 〇・七 | — | — | — | 五八三・七 |
| 合 日本 | 四八六・七 | 八、一四二・三 | 一六、六七七・五 | 九、二八〇・〇 | 五、〇三六・八 |
| 合 歐洲 | 九・五 | 二七・二 | 八〇・〇 | 一二三・九 | — |
| 合 米國 | — | — | 七、二九三・二 | 二、五〇八・一 | 一四、二八五・〇 |
| 合 朝鮮 | 〇・七 | 一〇二、四〇七・二 | 一四八、八一・一 | 一一、〇四一・九 | 七三、九八二・四 |
| 合 支那 | 三六、八五一・三 | | | | |
| 計 合計 | 三六、三三〇・二 | 一一〇、五七六・七 | 一七二、四三一・八 | 三三、八三五・六 | 九三、四〇四・二 |
| 十月 | 九七・〇噸 | 二、六〇三・五噸 | 二五五・五噸 | 二、九九三・七噸 | 二、一六二・七噸 |
| 十一月 | 九一二・三 | 六、八〇五・四 | 一、一四八・二 | 三、六二〇・六 | 四、八六五・一 |
| 十二月 | 四、六七一・五 | 三八、二二三・一 | 二、四八一・二 | 一〇、五六〇・六 | 一七、四七二・二 |



| 月 | 取引 |
|---|---|
| 一月 | 六、六五八・五 |
| 二月 | 二二、二二三・八 |
| 三月 | 二五、二七一・五 |
| 四月 | 二三、四九三・五 |
| 五月 | 一三、八一〇・四 |
| 六月 | 一、七二六・八 |
| 七月 | 三、一七五・〇 |
| 八月 | 三、六五二・三 |
| 九月 | 四、八七五・一 |
| 合計 | 一一〇、五七六・七 |
| 一月 | 二九、九一一・八 |
| 二月 | 二二、三〇三・二 |
| 三月 | 三一、六三五・二 |
| 四月 | 二一、四九六・七 |
| 五月 | 一〇、四一二・三 |
| 六月 | 四、一六九・九 |
| 七月 | 二、九一〇・二 |
| 八月 | 一、八九五・九 |
| 九月 | 六四・六 |
| 合計 | 一七二、四三一・八 |
| 一月 | 四、八〇一・五 |
| 二月 | 三、二五四・五 |
| 三月 | 六、四二〇・七 |
| 四月 | 二、三三三・四 |
| 五月 | 七五九・五 |
| 六月 | 四二二・五 |
| 七月 | 三九四・六 |
| 八月 | 五六・一 |
| 九月 | 六〇七・九 |
| 合計 | 二二、九三五・六 |
| 一月 | 七、一七〇・七 |
| 二月 | 一二、七五八・五 |
| 三月 | 二五、六一六・八 |
| 四月 | 一六、〇四七・一 |
| 五月 | 四、三六二・八 |
| 六月 | 四、四七二・〇 |
| 七月 | 一、五六五・四 |
| 八月 | 三、六一三・五 |
| 九月 | 六二二・五 |
| 合計 | 九三、四〇四・二 |
| 一月 | 三三、〇五七・六 |
| 二月 | 三一、一〇七・四 |
| 三月 | 三五、五二八・一 |
| 四月 | 二〇、一九四・三 |
| 五月 | 一七、四三八・三 |
| 六月 | 四、二六三・〇 |
| 七月 | 三、二四九・四 |
| 八月 | 六、〇三一・六 |
| 九月 | 五、二一六・四 |
| 合計 | 一八〇、六三六・一 |

取引　從來包米の取引は現物のみにして一車四九、一四〇斤、鈔票又は金票を以て取引されて居たが大正十五年末本品の定期取引上場問題が具體化して關係者の間に委員を設け上場に關する成案の作成に努めたのであるが此に關する取り決めは大體次の如きものである。

包米定期取引上場に關する取決め

一、單　位　一車

二、呼　値　百斤の價格

三、賣買方法　競賣買

四、期　限　四箇月

五、期　日　毎月十五日

六、受渡標準値段　高粱の場合と同樣

七、儘樁及格差　樁付上下各四格宛、格差は標準見本決定の際現品に依り決定する事

八、信託手數料　壹圓參拾五錢

九、標準見本　制定の時期及其適用に關する事項

(1) 標準見本の制定は此を三期に分つ

第一期　新穀出廻りより十二月初までに採取したる見本に依り制定する事。(其の適用期限は十二月十四日限及一月十四日限)

第二期　一月末より二月初までに採取したる見本に依り制定する事。(其の適用期限は二月十四日限及三月十四日限)

第三期　三月末より四月初までに採取したる見本に依り制定する事。(その適用期限は四月十四日限より十一月十四日限までのもの)

(2) 新穀代用期間　十月十四日限及十一月十四日限

(3) 舊穀代用期間　十二月十四日限及一月十四日限

但し新穀舊穀の格差は見本に依り定むる事。

一〇、檢査項目　左の項目に就いて檢査する事

(1) 水分の多少即ち乾燥程度

(2) 結實の良否(重量檢査)

(3) 狹雜物の混入程度

(4) 色　澤

(5) 粒の整否

一一、檢査方法

水分の多少及結實の良否は器械檢査を爲す事。又標準含水率の決定は今年は實物に付き研究委員中經驗家の鑑定に基き此を器械檢査に附したる後含水量を定むる事。水分は等級を上下するのみとし不合格條件に加へざる事。但し季節に依り水分關係にて將に變敗せんとする恐あるものに對しては檢査上斟酌を加ふる事。檢査は見本摘出當日此を行なひ計量は引き續き可成早く行ふ事に埠頭當局の諒解を得る事。尙ほ埠頭構内に於ける乾燥作業に就いては五六月は差支なく三四月は推貨相當多きも出來る丈便宜を計る旨埠頭當局の承諾を得たる事。

一二、檢査見本採取方法及檢査料

見本採取法は一箇年を通じ普通檢査のみとし山の上部五十袋を卸し袋の口より底に達するまでサシを挿入し採取する事。但し檢査料は金三圓とする事。

一三、檢査不合格の場合

受渡し物件が不合格となりたる場合には信託會社に於てその通知を發したる翌日より五日間以内に差換を爲す事を得る事。右差換は通じて二回を限りとし差換二回に及ぶも尙ほ不合格品ありたる場合にはその部分に對し受渡し標準値段を以て決濟し受渡しを終了せしむる事。

一四、過不足數量に關する事項

受渡は總べて證券面の數量を以てし計量の結果過不足數量は受渡標準値段を以て決濟する事。但し埠頭構内に於て入手し又は期限更新の爲め減量したるものは元證券に記載の數量に對する埠頭事務所の證明書を添附し受渡に供する事を得る事。右但書の取扱は現信託清算規定に抵觸する所あるに依り之に付ては信託當事者に於て之に順應する樣規定を改正する事。

## 第三節　滿洲主要市場に於ける包米相場

滿洲各主要市場に於ける包米の相場を示せば次の如くである。

遼陽玉蜀黍現物相場表（遼陽取引所月報　一支斗小洋建）

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十一年 | 〇・七〇 | 〇・八五 | 〇・九三 | 一・〇〇 | 一・〇八 | 一・〇〇 | 〇・九九 | 〇・九〇 | 〇・九三 | 〇・九八 | 〇・八九 | 九六 | 〇・九三 |
| 大正十二年 | 〇・九九 | 一・〇一 | 一・〇一 | 一・〇三 | 一・〇四 | 一・〇〇 | 一・〇〇 | 一・〇一 | 一・〇三 | 一・〇八 | 一・二〇 | — | 一・〇五 |
| 大正十三年 | — | 一・一九 | 一・一二 | 一・一七 | 一・二九 | 一・二七 | 一・二七 | 一・二〇 | — | — | — | — | 一・二一 |

備考　大正十三年後遼陽取引所は廢止された。

奉天玉蜀黍相場累年月別表（奉天商業會議所月報　一支斗小洋建）

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正九年 | 一・二五 | 一・二七 | 一・二三 | 一・二八 | 一・五三 | 一・六四 | 一・七七 | 一・九一 | 一・七五 | 一・五〇 | 一・四七 | 一・三九 | 一・五一 |
| 大正十年 | 一・二六 | 一・二四 | 一・二三 | 一・四六 | 一・五〇 | 一・四四 | 一・三六 | 一・三六 | 一・二〇 | 一・〇四 | 一・〇二 | 〇・九二 | 一・三八 |
| 大正十一年 | 〇・九〇 | 〇・九三 | 一・〇一 | 一・〇一 | 一・二四 | 一・〇八 | 一・一六 | 一・〇〇 | 〇・九五 | 〇・九〇 | 一・〇〇 | 一・〇〇 | 一・〇四 |
| 大正十二年 | 一・〇七 | 一・二五 | 一・二五 | 一・二五 | 一・二二 | 一・〇五 | 一・〇七 | 一・〇九 | 一・一〇 | 一・二二 | 一・二四 | 一・一五 | 一・一三 |
| 大正十三年 | 一・一二 | 一・一四 | 一・一五 | 一・一九 | 一・二五 | 一・四〇 | 一・六五 | 一・九七 | 一・六九 | 一・七二 | 一・六二 | 一・六七 | 一・四七 |
| 大正十四年 | 一・七五 | 一・八五 | 二・〇九 | 二・六五 | 三・〇五 | 三・二〇 | 三・〇三 | 二・八六 | 一・七八 | 一・九〇 | 一・九九 | 二・四一 | 二・三八 |

開原包米現物月別相場表（全定相場は支那桝一斗三十斤に對する値段にして小洋銀建とす）

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十一年 | 八四七 | 八三三 | 九五三 | 一、一九五 | 一、〇一〇 | 九二一 | — | — | — | — | 一、〇八〇 | 一、〇一五 | 九七四 |
| 大正十二年 | 一、〇八六 | 一、〇〇六 | 九六八 | 一、〇〇〇 | 一、〇一五 | 一、〇〇二 | — | — | — | 一、〇四〇 | 一、〇二六 | 一、〇二二 | 一、〇二六 |
| 大正十三年 | 九七四 | 一、〇三九 | 一、〇五四 | 一、〇四九 | 一、〇四四 | 一、〇五五 | 一、〇八〇 | 一、〇八四 | 一、〇九五 | 一、〇八六 | 一、〇六四 | 一、〇五七 | 一、〇六三 |
| 大正十四年 | 一、〇六四 | 一、〇八六 | 一、〇三六 | 一、〇四九 | 一、〇四五 | 一、〇四五 | 一、〇四五 | 一、〇四五 | 一、〇四五 | 一、〇四五 | 一、〇四五 | 一、〇四五 | 一、〇四五 |
| 大正十五年 | 二、〇二一 | 二、〇四二 | 二、〇二六 | 二、〇〇〇 | 一、九五五 | 一、九五五 | 一、九五五 | 一、九五五 | 一、九五五 | 一、九五五 | 一、九五五 | 一、九五五 | 一、九五五 |
| 昭和元年 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 | 二、〇二〇 |

四平街包米現物月別相場表（公定相場は支那桝壹斗三十八斤に對する値段にして奉天票建とす）

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十一年 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 大正十二年 | 九八八 | 九八八 | 九五三 | 九五八 | 一、〇一〇 | 一、〇一〇 | 一、〇一五 | 一、〇一五 | 一、〇一五 | 一、〇一五 | 一、〇一五 | 一、〇一五 | 一、〇八九 |
| 大正十三年 | 一、〇七一 | 一、〇三五 | 一、〇三五 | 一、〇三五 | 一、〇三五 | 一、〇三五 | 一、〇三五 | 一、〇三五 | 一、〇三五 | 一、〇三五 | 一、〇三五 | 一、〇三五 | 一、〇三五 |
| 大正十四年 | 一、〇六八 | 一、〇八六 | 二、〇二六 | 三、〇五六 | 三、〇五六 | 三、〇五六 | 三、〇五六 | 三、〇五六 | 三、〇五六 | 三、〇五六 | 三、〇五六 | 三、〇五六 | 三、〇五六 |
| 大正十五年 | 二、六九二 | 二、八一〇 | 三、〇一四 | 三、〇四八 | 三、〇四一 | 三、〇四一 | 三、〇四一 | 三、〇四一 | 三、〇四一 | 三、〇四一 | 三、〇四一 | 三、〇四一 | 三、〇四一 |
| 昭和元年 | 二、六二一 | 二、六四三 | 二、八六 | 二、九五 | 三、一三三 | 三、八〇八 | 三、四九八 | — | — | — | 四、三七七 | — | 三、二三六 |

長春包米現物月別相場表（公定相場は支那桝壹石三五〇斤に對する値段にして建値は銀建とす）

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十一年 | 五、三九〇 | 五、一六〇 | 五、七四〇 | 六、五二〇 | — | 五、六〇〇 | 四、七八〇 | 四、九〇〇 | 五、九六〇 | 六、〇八〇 | 六、一八〇 | 五、一八九 |
| 大正十二年 | 六、四九〇 | 六、三七〇 | 五、一九六 | 五、二七 | 五、七二〇 | 六、五二〇 | — | — | — | 七、〇〇 | 七、〇〇〇 | 六、一六九 |
| 大正十三年 | 六、三一〇 | 六、六二〇 | 六、八五〇 | 七、八〇 | 八、三〇 | 八、三〇 | 九、一五〇 | 九、五〇〇 | 八、六五〇 | 七、七二〇 | 七、四〇〇 | 八、三九 | 七、九〇一 |
| 大正十四年 | 八、四六〇 | 八、八六〇 | 九、七四五 | 一一、七五 | 一三、八九五 | 一四、四一五 | 一四、一二〇 | 一三、一〇〇 | 八、五〇〇 | 七、一〇 | 七、五五〇 | 八、二〇 | 一〇、五七三 |
| 大正十五年 | 九、四四〇 | 八、五九〇 | 八、四一〇 | 九、三〇〇 | 八、五九〇 | 八、九八 | 八、一八 | 七、三三 | 七、七七〇 | 九、二二 | 一〇、七〇 | — | 八、一七一 |

# 第四章　滿洲包米の輸移出と輸移出先に於ける滿洲包米事情

## 第一節　滿洲包米の輸移出狀況

滿洲包米の輸移出高は滿洲包米作の豐凶需要地に於ける需要の强弱及び銀相場の高低等に依つて支配せらるゝは云ふまでもない。從つて此が輸移出數量の如きも年に依り甚だしき變化があり大正七年より大正九年頃まで には八、九十萬擔の間を上下して居たものが大正十年に於ては一百二十萬擔を超へ、翌大正十一年には三百萬擔を突破するの盛況を呈した。大正十二年には稍減少せりと雖も尙ほ二百四十萬擔を超過して居る。大正十三年の輸移出高が八十六萬擔餘に激減したのは前秋に於ける滿洲農作物の凶作に依りその輸移出餘力の減退せると例年の需要地に於ける需要も一般に强からざりしに原因する。然るに翌大正十四年は再び二百三十四萬擔を輸移出を見て居る。

此が輸出徑路は他の特產物と同じく各海關より輸移出さるゝのであるが北滿方面より輸出さるゝ數量は僅少で主として南滿經由の上需要地に仕向けられて居る。特に移出先が主として支那各地である關係上大連及び營口經由のものが多く特に大連より輸出さるゝものは常に全輸出數量中絕對多數を占めて居る有樣である。

次に北支那貿易年報に依つて包米の輸移出高とその仕向國とを揭ぐる。

滿洲玉蜀黍輸移出高累年表　數量　單位百斤　價格　單位海關兩

| 年次＼港別 | 南滿三港 | | 哈爾賓管區 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 數量 | 價額 | 數量 | 價額 | 數量 | 價額 |
| 大正七年 | 八六六、六五一 | 一、六六九、九〇七 | 五、〇〇七 | 五、五二七 | 八七一、六六八 | 一、六六四、四三四 |
| 大正八年 | 九四一、六七三 | 一、五三四、九五七 | 一〇、四〇一 | 七、九九五 | 九五二、〇九四 | 一、五四一、九五二 |
| 大正九年 | 八九八、七七四 | 二、一一五四、八四三 | 六、三九 | 八一二 | 八九九、四一三 | 二、一一五五、六五四 |
| 大正十年 | 一、二三七、九九二 | 二、七四四、一九七 | 六、九七五 | 九、九〇四 | 一、二八一、九六七 | 二、七五四、一〇一 |
| 大正十一年 | 三、〇六三、四五八 | 六、四三二、一八五 | 二七、八九三 | 四二、七六五 | 三、〇九一、三五一 | 六、四七四、九七〇 |
| 大正十二年 | 二、四一五、一一〇 | 四、八七一、〇一六 | 九、二五四 | 二二、八九六 | 二、四二四、三七四 | 四、八八三、九一二 |
| 大正十三年 | 八六三、九四二 | 二、〇五三、一五〇 | — | — | 八六三、九四二 | 二、〇五三、一五〇 |
| 大正十四年 | 二、三四九、八五二 | 五、二二五、五六〇 | — | — | 二、三四九、八五二 | 五、二二五、五六〇 |

玉蜀黍輸移出數量及價額仕向國別累年表　數量　單位擔　價額　單位海關兩

| 年次＼仕出港＼單位 | 仕向地 | 日本 | | 朝鮮 | | 支那 | | 其他 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 數量 | 價額 | 數量 | 價額 | 數量 | 價額 | 數量 | 價額 | 數量 | 價額 |
| 大連 | | 三、一八五 | 六七、九〇七 | 七三二 | 一、四二二 | 六六八、六四三 | 二、〇八八、三六四 | 一、五一二 | 二、九一六 | 六六六、〇六九 | 一、八〇、五九八 |

## 滿洲米の輸移出と輸移出先に於ける滿洲米事情

| 年七十正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

| 年八十正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

| 年九十正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

| 年十正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

| 年一十正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

| 年二十正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

| 年三十正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

| 年四十正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |





| 年七正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

| 年八正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

| 年九正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

| 年十正大 | 營安大 | 日東 | 連 |
|---|---|---|---|
| 計 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 大 | 三四、三三 | 三四、三三 | 一、〇〇〇 |
| 連 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 |

## 第二節　輸移出先に於ける滿洲包米事情

### 第一項　日本各地に於ける事情

#### (一)　横濱

輸入起原、玉蜀黍の初めて當港に輸入せられしは大正七年前後であつて當時東京早稲田に於ける芳賀コーン、スタージ研究所及び日本食料研究所がその研究資料として已に米國より輸入せられし玉蜀黍澱粉と共にその研究資料に供するの目的を以て輸入した。

輸入數量、大正十三年度の輸入數量を示せば次の如くである。

大正十三年度　一〇、八七一袋　一袋百四十斤入　此を月別に示せば次の如し。（單位袋）

| 扱者＼月次 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 朝日商會 | 三四九 | 一、三二七 | 一、三九九 | — | 二、〇〇九 | 三五〇 | — | — | 一八〇 | 三四三 | 三五四 | 六七二 | 六、八八二 |
| 君塚商會 | 六三 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 六三 |
| 鈴辨商會 | — | 二、八〇〇 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 二、八〇〇 |
| 村松商會 | — | 三三四 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 三三四 |
| 共益社 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 四方商店 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 合計 | 四二 | 四、四五一 | 一、三九九 | — | 二、〇〇九 | 三五〇 | 二 | — | 一八〇 | 三四三 | 三五四 | 一、三七三 | 一〇、八七一 |

用途、燒酎原料、醬油原料、製菓原料、澱粉原料等として用ひらる。

競爭商品、燒酎原料としての競爭商品は切干等高粱碎米等とす。

取扱業者（大正十四年調）

齊藤芳太郎　東京市深川佐賀町二丁目　　中川喜久夫　東京市深川佐賀町二丁目

影山商店　同　　朝日商會　同

林伊三郎　東京市深川材木町

#### (二)　神戸

輸入起原、當神戸港に滿洲玉蜀黍の輸入せられたには日清戰役後即ち明治二十八年暮頃にして營口に在住せる一支那商人が見本を持ち來り商談を進めしに始まり其の後大連より主として積出されつゝ今日に至つた。

輸入數量、最近三箇年間に於ける包米の輸入數量を示せば次の如くである。

| 自大正十年十月 至大正十一年九月 | 自大正十一年十月 至大正十二年九月 | 自大正十二年十月 至大正十三年九月 |
|---|---|---|
| 一一〇、五七六噸 | 一七二、四三六噸 | 二二、九三五噸 |

用途、澱粉原料として最も多く用ひられ又飼料食料釀造原料としても用ひらる。

相場、相場次の如し。（百斤金圓建）

| 年次＼月別 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 自大正十一年十月至大正十二年四月 | 四・〇〇 | 四・二八 | 四・一〇 | 四・二〇 | 四・六〇 | 四・四五 | 四・七五 | — | — |
| 自大正十二年十月至大正十三年四月 | 四・九五 | 五・〇〇 | 四・八五 | 四・七五 | 四・七〇 | 四・九五 | 四・九〇 | 五・二〇 | 五・六五 |
| 自大正十三年十月至大正十四年四月 | 六・二〇 | 六・四五 | 六・〇五 | 六・二〇 | 六・四〇 | 六・六〇 | 七・一〇 | — | — |

需要の將來、相場割高を示しつゝあるを以て內地馬糧向輸入は激減せるか將來ことても新なる加工の方法發見せられざる限り輸入の急增を見るが如き事はあるまい。

取扱業者、當地に於ける取扱業者左の如し。（大正十四年調）

瓜谷商店　兵庫宮內町　宮野甚吉　海岸通六丁目　百川彌太郎　榮町五丁目

## （三）朝鮮

輸入起原、滿洲產包米は國境地方に於ける農民の食料として古來より對岸貿易を以て小量の輸入を見居たるものなるが大正八年に至り未曾有の旱害を蒙りたるため農民の食料に不足を來し從前に比し急に輸入增加を示した。

用途、農民の食料に供する外酒造用澱粉製造原料として使用せられる。

競爭商品、朝鮮に於ける包米の生產額は前述せる如くなるも土產品の大部分は農民により直接消費せられ商品として市場に現るゝ事は少ない。只農民の食料に供せらるゝ關係上滿洲粟及外國米等が競爭商品の關係に立つ。

相場、最近三箇年間に於ける各地平均相場を示せば次の如くである。

| 月別＼地方別＼年次 | 咸鏡北道主要都邑平均 | | | 平安北道新義州平均 | | | 同　宣川　平均 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 | 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 | 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 |
| 一月 | 八・〇〇円 | 一一・〇〇円 | 一二・〇〇円 | 六・〇〇円 | 八・五〇円 | 一一・〇〇円 | 九・〇〇円 | 八・〇〇円 | 一〇・〇〇円 |
| 二月 | 八・〇〇 | 一一・〇〇 | 一二・〇〇 | 六・〇〇 | 八・五〇 | 一一・〇〇 | 九・〇〇 | 八・〇〇 | 一〇・〇〇 |
| 三月 | 八・五〇 | 一二・〇〇 | 一二・〇〇 | 六・〇〇 | 八・五〇 | 一一・〇〇 | 九・〇〇 | 八・五〇 | 一〇・五〇 |
| 四月 | 八・〇〇 | 一二・〇〇 | 一二・五〇 | 六・〇〇 | 八・〇〇 | 一一・〇〇 | 九・二五 | 九・〇〇 | 一〇・五〇 |
| 五月 | 八・〇〇 | 一二・〇〇 | 一二・〇〇 | 六・〇〇 | 一一・〇〇 | 一一・〇〇 | 九・〇〇 | 九・〇〇 | 一一・〇〇 |
| 六月 | 八・〇〇 | 一二・〇〇 | 一二・〇〇 | 六・〇〇 | 一一・〇〇 | 一一・〇〇 | 九・〇〇 | 九・五〇 | 一一・〇〇 |
| 七月 | 六・〇〇 | 一一・〇〇 | 一二・〇〇 | 六・〇〇 | 一一・五〇 | 一一・〇〇 | 九・五〇 | 九・五〇 | 一二・五〇 |
| 八月 | 六・〇〇 | 一一・〇〇 | 一二・〇〇 | 六・〇〇 | 一一・五〇 | 一一・〇〇 | 九・五〇 | 九・五〇 | 一二・五〇 |
| 九月 | 六・〇〇 | 八・五〇 | 一四・〇〇 | 六・五〇 | 一一・五〇 | 一一・〇〇 | 九・〇〇 | 九・五〇 | 一三・〇〇 |
| 十月 | 七・〇〇 | 八・五〇 | 一六・〇〇 | 六・五〇 | 一一・五〇 | 一一・〇〇 | 八・五〇 | 一〇・〇〇 | 一三・〇〇 |
| 十一月 | 七・五〇 | 一一・〇〇 | 一八・〇〇 | 六・五〇 | 一一・五〇 | 一一・〇〇 | 八・五〇 | 一〇・〇〇 | 一四・〇〇 |
| 十二月 | 九・〇〇 | 一一・〇〇 | 一八・〇〇 | 六・五〇 | 一一・五〇 | 一二・〇〇 | 八・五〇 | 一〇・〇〇 | 一四・〇〇 |
| 平均 | 七・五四 | 一〇・六二 | 一四・一二 | 六・一五 | 一〇・三七 | 一一・〇一 | 八・九八 | 九・一七 | 一一・八三 |

輸入の將來　包米は主として北鮮地方に栽培せられ從つて此を食料に供する者も亦北鮮地方住民なるか農民の需要は自家生産品を以て需要を充しつゝあるの狀況にして鮮内生産品に比し品質の劣れる滿洲産包米は一般の嗜好に適せず將來とても特種の事由存せざる限り輸入の增加を期待することは出來ない。

取扱業者。（大正十四年調）

咸境北道穩城郡穩城面西興洞　朴信佛　平安北道新義州眞砂町　金佛濟
咸境北道鐘城郡鐘關面關山洞　蔡一點　同　金信浩
同　金南協　平安北道宣川郡宣川面川南洞　姜國鉉
同　金元用　同　鄭明德
同　金載鎬　平安北道宣川郡宣川面川北洞　玉奎伯
咸境北道茂山郡邑面南小洞　崔玉石　同　崔基治
同　朴昌逸　平安北道宣川郡郭山面鹽湖洞　朴允景
平安北道新義州榮町　金貞稜　同　張觀貞
同　阿部繁男　平安北道宣川郡定州面城內洞　朴載運
同　獨孤烈　同　金致福
平安北道新義州眞砂町　廣信號　同　許璡

平安北道宣川郡定州面城內洞　金亨玉　咸境南道甫山郡山南面土里　沈昌濟

## 第二項　支那各地に於ける滿洲包米事情

### （一）上海

輸入起原、本品の移入起原に關しては記錄の徵す可きものなくその動因亦詳ならざるも支那人當業者の言ふ所を綜合するにその移入は今より約二十餘年前のことにして食料及び飼料不足の際割安なる本品を滿洲より移入せしが抑々の始なりと傳へられて居る。

輸入數量、滿洲より移入せられたる包米數量を示せば次の如くである。

上海向包米仕出數量（單位百斤　滿洲貿易詳細統計）

| 仕向地＼年次 | 大正九年 | 大正十年 | 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 | 大正十四年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大連 | — | 八、七二三 | 一、六二八、七六〇 | 一、一七九、七四七 | 八九、九二八 | 七二、一〇四 |
| 營口 | — | — | 三二、五七八 | 四二、三四八 | 一三、八九八 | — |
| 合計 | — | 八、七二三 | 一、六六一、三三八 | 一、二二一、〇九五 | — | 七二、一〇四 |

備考　安東港より上海に仕向けられたる數量は僅少なり

用途、主として食料及び飼料として用ひらる。食料としては揚子江以北に於て此をそのまゝ煮きて食料とするの外上海其他の大都市に於ても之を粉となし饅頭を製して下層民の食用に用ふる。尙ほ釀造原料としても少量需要せ

られる。

競爭商品、玉蜀黍も高粱と同じく食料或は飼料として需要せらるゝ關係上雜穀との競爭は之を免るゝを得ない。而して主なる競爭品は米、麥、麥粉、粟、豆類、麩等にして此等雜穀類の豐凶は直ちに本品の需要に影響するは勿論である。

相場　（上海兩　百斤建）

| 年次 / 月 / 高低 | 大正十一年 最高 | 大正十一年 最低 | 大正十二年 最高 | 大正十二年 最低 | 大正十三年 最高 | 大正十三年 最低 | 大正十四年 最高 | 大正十四年 最低 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一月 | — | — | 二・五三 | 二・四八 | 二・七〇 | 二・四八 | 二・六〇 | 二・六〇 |
| 二月 | — | — | 二・五三 | 二・四三 | 二・七八 | 二・五五 | 二・八〇 | 二・七〇 |
| 三月 | 二・七二 | 二・五九 | 二・五三 | 二・二四 | 二・六五 | 二・八五 | 二・八〇 | 二・八〇 |
| 四月 | 二・九八 | 二・四〇 | 二・五五 | 二・一五 | 二・六一 | 二・三〇 | 三・〇〇 | 二・九〇 |
| 五月 | 二・九〇 | 二・九〇 | 二・六〇 | 二・二五 | 二・八〇 | 二・八〇 | 三・五〇 | 三・一〇 |
| 六月 | 二・九〇 | 二・九〇 | 二・四五 | 二・二五 | 二・八〇 | 二・八〇 | 三・五〇 | 三・五〇 |
| 七月 | — | — | 二・四三 | 二・三六 | 二・八〇 | 二・八〇 | — | — |
| 八月 | 二・一九 | 二・一六 | 二・四八 | 二・四〇 | 二・七二 | 二・七二 | — | — |
| 九月 | 二・二六 | 一・八九 | 二・四八 | 二・四五 | 二・七三 | 二・七三 | — | — |
| 十月 | 二・四六 | 二・二〇 | 二・五九 | 二・五九 | 二・七二 | 二・七二 | — | — |
| 十一月 | 二・二六 | 二・二〇 | 二・八七 | 二・六二 | 二・七三 | 二・七三 | — | — |
| 十二月 | 二・四七 | 二・四五 | 二・六八 | 二・四〇 | 二・七三 | 二・七三 | — | — |
| 平均 | 二・五九 | 二・四二 | 二・五七 | 二・二〇 | 二・七二 | 二・六六 | 三・〇四 | 二・九五 |

備考　大正十四年は上半期のみ

移入の將來、江北地方の人口增加及び家畜飼料として年々需要增加の傾向にあるから本品の上海即ち南支那輸入の將來は有望なりと云ふ事を得るが長江及南支那に於ても包米の產額多きに依り土產品との相場關係及び其他競爭品との相場關係等に對し比較的割安にならなければ移入の急增を期待すること難かる可し。

取扱業者、當地に於ける滿洲包米の取扱者の主なるものを上ぐれば次の如くである。

邦　商（大正十四年調）

三井洋行　上海四川路四九號　　三菱公司　上海廣東路九號

支那商

豫泰　上海南市荳市街　　駿源　上海南市荳市街

晉大同　　新豐同

泰瑚同　　聚興同

## （二）天　津

移入起原、滿洲包米の天津港への移入起原に就いては信す可き記錄の徵す可きものがないが今より約二十年前頃から移入せられその後漸次移入も增加したのであるその主要なる原因を摘錄すれば

一、直隸地方に於ける戰禍水災その他の一時的事情に依る一般農作物の不作。

二、棉花及び米栽培增加の爲め食用農產物の作付が減少せる事。

三、高粱酒釀造增加に依る食料の不足

等を擧ぐる事が出來る。

移入數量、滿洲包米が天津に移出さるゝものは大連及營口港よりされるものであるが南滿三港から天津に向けて積出された數量を示すと次の如くである。

滿洲貿易詳細統計（單位百斤）

| 積出港＼年次 | 大正九年 | 大正十年 | 大正十一年 | 大正十二年 | 大正十三年 | 大正十四年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大連 | 六五、八七六 | 四七、四九一 | 三〇、四一〇 | 八八、九四五 | 一六七、〇〇一 | 九八一、七六三 |
| 營口 | 四、七六六 | 三九、七五九 | 一〇四、六四九 | 八八、九八六 | 二八、〇八一 | 四五三、一三四 |
| 安東 | — | — | — | — | 一五 | 四一、七九八 |
| 合計 | 八〇、六四四 | 七八、二五〇 | 一三九、〇五九 | 一七、九三一 | 一九五、一〇七 | 一、四五六、八一四 |

右大正十四年中に於ける移入數量が異狀の增加を示して居るのは同年に於ける奉直戰に依る軍隊の食料並に戰禍に依る耕地の荒廢等がその主なる原因である。

用途、主として農民勞働者及貧民の食料に供せらるゝ。

競爭商品、前述の如く本品は主として食料として用ひらるゝものであるから競爭商品としても高粱、麥粉、小麥等を擧ぐる事が出來るが元來本品が下層民の食料たる關係上直接又滿洲高粱がその競爭關係に立つ。而して包米と高粱との移入關係が將來如何に變化するから豫斷し難い。

相場、最近三箇年間に於ける包米の月別相場を示せば次の如くである。

（單位百五十斤）

| 年次＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正十一年 | 五・二〇元 | 五・三〇元 | 五・一五元 | 四・八〇元 | 四・七〇元 | 四・五〇元 | 四・〇〇元 | 三・八〇元 | 三・七〇元 | 四・〇五元 | 四・六〇元 | 五・五〇元 | 四・五三元 |
| 大正十二年 | 五・三〇 | 五・三〇 | 五・二五 | 五・三〇 | 五・〇〇 | 五・一五 | 四・九〇 | 四・五〇 | 四・三〇 | 四・四〇 | 四・八〇 | 五・三〇 | 四・九五 |
| 大正十三年 | 五・二〇 | 五・一〇 | 五・二五 | 五・五〇 | 五・六〇 | 五・八〇 | 六・一〇 | 六・二〇 | 六・四〇 | 六・五〇 | 六・八〇 | 七・〇〇 | 五・九五 |

移入の將來、包米の需要は前記外國產小麥及麥粉に壓迫せらるゝ事なき以上その需要は漸次增加を期待する事が出來る。即ち高粱の需要と略同一の將來を有すると云ふ事が出來るのである。

取扱業者（大正十五年調）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 義和西集 | 源興義 | 東門外扒頭街 | 復興茂　宮北福神街 |
| 公興有金湯橋 | 源豐厚 | 特二區平安里 | 立豐　河東 |
| 益豐東門內 | 瑞興昌 | 河東 | 聚和順　英界 |
| 裕昌公特一區小劉莊 | 德聚厚 | 河北三條右 | 仁和義　宮北福神街 |
| 恒記東門小洋貨街 | 成發 | 特二區 | 同聚　河北 |
| 德發特二區糧店街 | 巨利 | 河東 | 興隆　東天仙後 |
| 合記北門西 | | | |

昭和二年三月十五日印刷
昭和二年三月二十日發行

南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課
編輯兼發行人　佐田弘治郎

大連市近江町九十一番地
印刷人　山田浩通

大連市近江町九十一番地
印刷所　東亞印刷株式會社大連支店

發行所　南滿洲鐵道株式會社

終